

昭和 63 年度
埋蔵文化財緊急発掘調査概報

垂水遺跡
護国寺旧伽藍

1989年3月

吹田市教育委員会

序

吹田市は大阪府の北西部に位置し、千里丘陵と神崎川によって育まれた地で、私達の祖先の足跡が多く残されています。

吹田市の埋蔵文化財は、現在90余ヶ所が確認されており、今後の調査活動の進捗により増加することも考えられます。しかし、急速な都市化の進展は、地中に埋もれる貴重な先人達の遺産の散逸をもたらし、憂慮すべき事態となっております。

このため、市教育委員会としては、昭和49年度から文化庁、及び大阪府教育委員会の御指導をいただき、国庫補助事業として埋蔵文化財の発掘調査を実施してまいりました。

昭和63年度におきましては、弥生時代の高地性集落として大阪湾岸において、重要な位置を占める垂水遺跡と、創建が室町時代にまで遡る古刹である護国寺旧伽藍について調査を行いました。これらの調査成果は今後の活動に反映されるものと考えられます。

毎年調査される遺跡は、面積的には点でしかありませんが、市教育委員会では遺跡の重要性の周知徹底を進め、点から面へと広がりをもった埋蔵文化財の保護を実施していきたいと考えております。

市教育委員会では、こうした目標に向かって、日々誠意努力を傾ける所存であります、市民の皆様方におかれましても、なお一層の御理解と御協力をたまわりますよう、御願い申し上げます。

平成元年3月

吹田市教育委員会

教育長 長光達郎

例　　言

1. 本書は、昭和63年度国庫補助事業として実施した、垂水遺跡、護国寺旧伽藍の緊急発掘調査の成果をまとめたものである。
2. 発掘調査地点は次の通りである。
 - 第1次 垂水遺跡 吹田市垂水町1丁目753-1
 - 第2次 護国寺旧伽藍 吹田市高浜町4番33号
3. 発掘資料の整理作業は、吹田市青山台2丁目5番地、青山台小学校内文化財分室において実施した。
4. 本書の執筆は第1章・3章を増田真木が、第2章を田中充徳が執筆した。
5. 図中の方位は磁北を示し、標高はT.P.（東京湾標準潮位）を示す。
6. 本文中の遺物番号は図番・挿図とも統一した。縮尺は瓦は1/5、繩文土器は1/3、その他の土器については1/4に統一した。
7. 資料の整理にあたっては調査参加者以外に繩井美徳、三浦知子、櫻井和佳子、清水園子、横田和美、加々美幸一、藤村一成、山川康子、増田智美の協力を得た。
8. 発掘調査においては、沢井清氏、護国寺、中野哲夫氏をはじめ多くの方々の協力を得た。明記して謝意を表します。

発掘調査参加者名簿

調査主体　吹田市教育委員会 教育長 長光達郎
調査指導　大阪府教育委員会文化財保護課 係長 中井貞夫・係長 石神 怡
調査担当　吹田市教育委員会社会教育課 増田真木・田中充徳
調査員　横田 明・池田正道
調査補助員　大藤晴代・山本洋子

目 次

第1章 昭和63年度埋蔵文化財緊急発掘調査の契機	1
第2章 垂水遺跡の調査	4
第3章 護国寺旧伽藍の調査	11

挿 図 目 次

第1図 発掘調査地点位置図	2
第2図 垂水遺跡調査地周辺図	4
第3図 トレンチ配置図	4
第4図 土層断面図	5
第5図 溝1平面図	7
第6図 溝2～7平面図	7
第7図 溝8平面図	8
第8図 溝9平面図	8
第9図 最終検出面	9
第10図 出土遺物実測図	9
第11図 調査地点周辺図	11
第12図 吹田砂堆概略図	13
第13図 調査区平面図	14
第14図 調査区土層断面図	16
第15図 基壇上面堆積状況	17
第16図 創建時基壇平面図	19・20
第17図 基壇断面図	21
第18図 創建前遺構面平面図	23
第19図 出土瓦拓影・実測図	25
第20図 出土土器実測図(1)	27
第21図 出土土器実測図(2)	28
第22図 出土錢貨拓影	29
第23図 出土土器実測図(3)	30
第24図 糸文土器拓影・実測図	32
第25図 吉志部瓦窯焼成瓦拓影・実測図	32
第26図 基壇復元図	38

図版目次

- 図版1 垂水遺跡調査前近景・遺構検出状況(1)
- 図版2 垂水遺跡遺構検出状況(2)
- 図版3 垂水遺跡遺構検出状況(3)
- 図版4 垂水遺跡調査状況
- 図版5 垂水遺跡調査状況・遺物出土状況
- 図版6 垂水遺跡出土遺物
- 図版7 護国寺旧伽藍調査前近景
- 図版8 護国寺旧伽藍基壇検出状況
- 図版9 護国寺旧伽藍創建時基壇全景(1)
- 図版10 護国寺旧伽藍創建時基壇全景(2)
- 図版11 護国寺旧伽藍基壇検出状況
- 図版12 護国寺旧伽藍礎石検出状況
- 図版13 護国寺旧伽藍基壇断面(1)
- 図版14 護国寺旧伽藍基壇断面(2)
- 図版15 護国寺旧伽藍回廊検出状況
- 図版16 護国寺旧伽藍創建前遺構面検出状況(1)
- 図版17 護国寺旧伽藍創建前遺構面検出状況(2)
- 図版18 護国寺旧伽藍出土瓦
- 図版19 護国寺旧伽藍出土遺物(1)
- 図版20 護国寺旧伽藍出土遺物(2)
- 図版21 護国寺旧伽藍出土繩文土器

第1章 昭和63年度埋蔵文化財緊急発掘調査の契機

吹田市では文化庁、及び大阪府教育委員会の指導のもとに、昭和49年度以来、埋蔵文化財包蔵地内における小規模な開発工事に対して国庫補助事業として緊急発掘調査を実施してきた。昭和51年度からは開発の進行の著しい江坂地区の垂水南遺跡に対する継続的な発掘調査に対応し、さらに昭和55年度からは垂水南遺跡に限らず、広く市内各所の開発に対応するために市内の遺跡全般に対して事業を拡大した。

昨年度までの調査の実施によって、垂水南遺跡の遺跡範囲や遺物包蔵状況の確認をはじめ、先土器時代の吉志部遺跡の包蔵状況の確認、吉志部2・3号墳、29・32号須恵器窯跡、垂水遺跡、蔵人遺跡、七尾瓦窯跡周辺地等の調査において大きな成果を挙げてきた。

昭和63年度は垂水遺跡、護国寺旧伽藍の2ヶ所について実施した。

垂水遺跡は千里丘陵の東南端に位置する弥生時代の高地性集落として大阪湾岸に展開する遺跡群の中で重要な位置を占める。現在の行政区画では垂水町1丁目から円山町にかけて展開し、遺跡の範囲は東西600m、南北400mの広範に及ぶ。

遺跡は昭和初期に当地一帯で行われた住宅地開発とともに、弥生土器の出土が確認され、昭和5年、島田貞彦氏によって「摂津国豊能郡垂水先史時代遺跡」(『史前学雑誌2-5』)に紹介された。

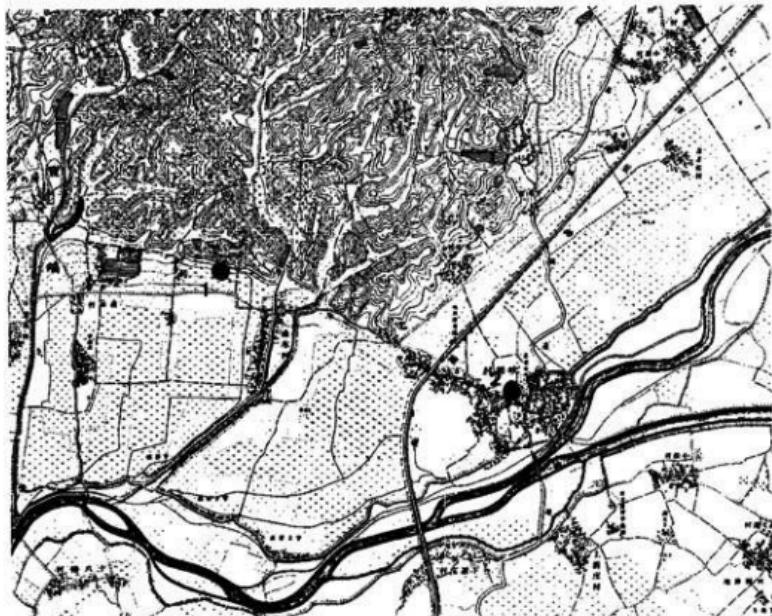
昭和30年すぎから、日本生命総合グランドの建設とともに、垂水神社背後の丘陵地帯が大きく削平され、円山町の住宅開発以後はほぼ旧状を保存されていたと思われる遺跡の西半部が消失し、遺跡の大半は壊滅的な破壊を受けたものと考えられる。この工事では膨大な量の弥生土器・石器を中心とする遺物が出土し、地元の研究者の收拾活動が行われたのをはじめ、関西大学によって造成地の一部において調査が実施され、「上方文化二号」に報告されたが、遺跡の全体の解明には至らなかった。

昭和48年から51年にかけて、垂水遺跡に対する本格的な発掘調査が、関西大学と吹田市によって実施された。この調査によって、弥生時代後期の住居址4棟、掘立柱建物跡、焼土坑、土壙墓等を検出し、後期を主に前期から後期にかけての多量の弥生土器が出土した。弥生時代以外では室町時代を中心とする中世の墓跡、小祠跡、竈跡等を検出し、本遺跡の弥生時代高地性集落としての性格とともに先土器時代石器散布地、室町時代を中心とする墓地としての性格を明らかにした。

その後、昭和55年から56年にかけて、垂水神社東方の丘陵裾部分の発掘調査で、溝、土坑、柱穴等を検出するとともに、弥生時代から室町時代にかけての全期間の遺物が出土した。丘陵上の垂水遺跡の弥生時代と中世の間を時期的に埋めるとともに、平安時代後半期の遺物については、西に接する式内大社垂水神社と関連する寺院の存在を想定できる所見を得られた。

昭和62年には丘陵下部の垂水町1丁目753-2において調査が実施された。従来、丘陵下部においては、昭和56年度の調査以外実施されておらず、地下包蔵状況等の実態は明かでなかった。この調査は小規模なものであったが、中世の条里地割に合致する小溝を検出するとともに、中世遺構面下層の包含層からIV様式を主とする多量の弥生土器が出土した。弥生土器は垂水遺跡の集落盛期前半の様相を具体的に示す資料であり、出土した東海・近江系の土器の検討から、集落発展の当初段階には丘陵下において東海系の土器文化の影響を強く受けた集落単位が丘陵上の、より発展する母体として機能したことが推測された。この調査は限られた面積であったが、資料的に垂水遺跡、弥生時代集落の発展の様相を知る上できわめて重要な調査であった。

今回、調査が行われたのは垂水町1丁目753-1における個人住宅建設に伴うものであり、当該地は昭和62年度の調査地点の丘陵側に北接する地点である。昭和62年度の調査の重要性から考えて、当地点も慎重に対処することが必要であり、遺構、遺物の存在が予想されることから調査を実施した。



第1図 発掘調査地点位置図 (S=1:40000)

- 1.垂水遺跡
- 2.護国寺旧伽藍

護国寺は吹田市高浜町4-33に所在する曹洞宗の寺院である。その沿革をみると、護国寺の創建は康暦2年(1380)に僧竺山得仙が師の高僧大徹宗令を開基とあおぎ、自らは第2代として開創したもので、当初は護久寺と称した。康応2年(1390)、將軍足利義満は護久寺に摂津国敷財の寺領を安堵せしめ、明徳2年(1391)に同寺を祈願所としており、以後、寺名を護国寺と改称したようである。ついで、足利義持も寺領等を安堵せしめ、護国寺は時の権勢家との関係も深く、護国寺縁起(延宝2年(1674)、僧高泉の録)によれば、善住庵、粗心庵、龍洞庵、寂照庵があったと伝えられる。

その後、16世紀後半、天正年間に兵火に遭い、堂宇は消失するが、慶長5年(1600)、当時吹田村を領していた旗本竹中出羽守重春の弟重賢の菩提所として復興された。慶安5年(1652)無住となるが、寛文年中(1661~1672)祖印によって復興され、現代に至っている。

また、当寺に伝えられる絹本着色般若菩薩像は鎌倉時代前期の製作と考えられる優品で、昭和25年8月、国の重要文化財に指定されている。

このように、護国寺は中世にまでその創建が遡り、時の権勢家とも関係の深い市内でも数少ない古刹の一つであるが、昭和53年に火災によって本堂と庫裏が消失し、この度、本格的な本堂と、居宅部分としての庫裏が再建されることになった。市教育委員会においては、当該地に室町時代創建期、及び以降の中世から近世にかけての寺院伽藍の存在が予想されること、また、東に隣接する高浜神社境内から古墳時代土師器と平安時代瓦が出土しており、当該地においても室町時代以前の遺構、遺物の存在も予想されることから、事前に試掘調査を実施し、その結果をもって改めて協議することとした。

試掘調査の結果、6ヶ所設定したトレンチの内、3ヶ所のトレンチにおいて室町時代の遺構面を検出し、石積みの基壇の東南隅部分、及び東西方向に等間隔で並ぶ4基の礎石を確認したが、多量の瓦の出土から旧伽藍の一部であると判断した。基壇上には焼土や炭の堆積が認められ、検出した礎石や石積みの一部が被熱していることや、遺物の出土状況から、この基壇が護国寺創建時から戦国時代に焼失するまでの旧伽藍の一部である可能性が高いと判断された。

室町時代遺構面の下層からは、鎌倉時代の遺構面を検出するとともに、繩文時代中期、弥生時代、古墳時代、平安時代、鎌倉時代と広い時期にわたる遺物が出土した。この試掘調査の結果、建築予定地内には旧伽藍が遺存しており、さらに、その下層においても鎌倉時代を中心とする遺構の存在する可能性が高いと判断され、発掘調査を実施することとした。

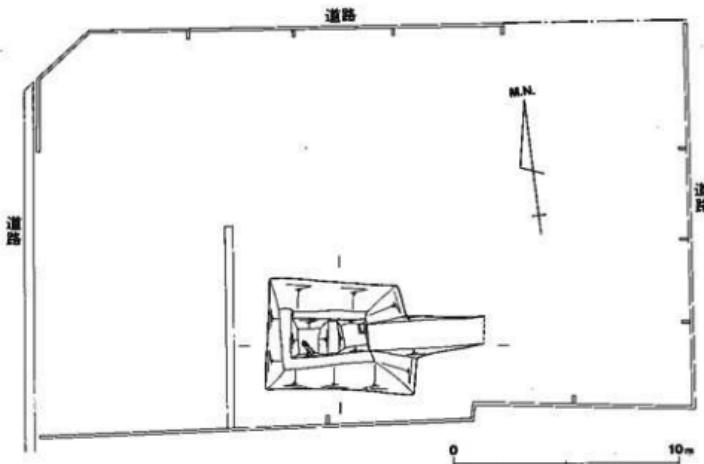
第2章 垂水遺跡の調査

1. 調査の経過

発掘調査地点は、垂水遺跡推定範囲の南端、標高 T.P. 約5.0m前後の宅地内で、現在の行政区画では、吹田市垂水町1丁目753-1に当たる。当地は、北側に広がる急峻な丘陵傾斜面が平坦になる所である。調査は、個人住宅建築に伴う事前調査として遺構・遺物の埋蔵状況を確認するために実施したものであり、昨年度の調査地点の北隣りにあたる。調査は、昭和63年5月6日から開始し、5×6mの調査区を設定した。そして、昨年度の調査所見を参考に、まず重機を使用して、現代盛土



第2図 垂水遺跡調査地周辺図 (1:5000)



第3図 トレンチ配置図

層、耕土層等を除去し、現地表下約1.8mで、中世期の遺物を包含する灰褐色砂質土層が検出されたため、それ以下については、人力による分層発掘を行った。

分層発掘の結果、現地表下約1.9~2.6m (T.P. 3.3~2.6m)までの間に、3面の中世造構面が確認され、計8条の溝、ピット1基が検出された他、現地表下約2.8m (T.P. 2.4m)から、茶褐色粘質土・暗茶褐色砂質土層をベースとして、溝1条、ピット1基が検出された。

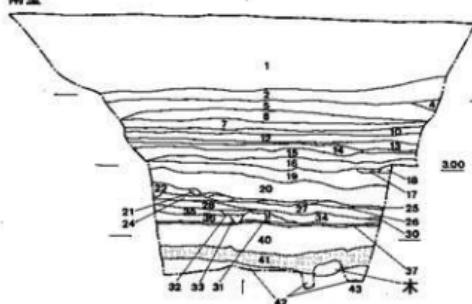
また、これらの土層の下、現地表下約3.3m (T.P. 1.9m)からは、厚さ約30cmの弥生時代遺物包含層を検出した。さらに下層の状況を把握するため、現地表下約3.9m (T.P. 1.7m)まで掘り下げたが、遺物・遺構等を検出することは出来なかった。

これらの遺構については、慎重に調査を行い、実測図化・写真撮影等の記録作成を行ったのち、トレーナーを埋め戻し、昭和63年5月26日に発掘調査を終了した。

2. 土層序

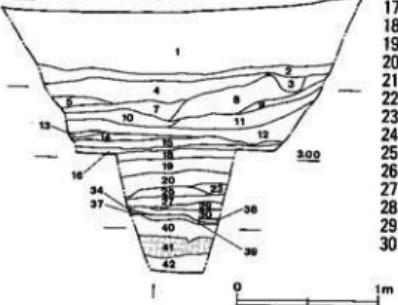
調査区の現地表面は、標高 T.P. 5.2m 前後で、現代盛土層（第1層）・近現代堆積層（第2

南壁



1. 表土層(現代盛土層)
2. 黒灰色粘質土層
3. 淡黒灰色砂質土層
4. 淡黒灰色砂質土層
5. 淡黒灰色砂質土層
6. 灰色砂質土層
7. 黑褐色腐食土層
8. 灰色細砂層
9. 灰白色細砂層
10. 暗茶褐色砂質土層
11. 淡灰色細砂層
12. 黑褐色砂質土層
13. 灰褐色砂質土層
14. 灰色砂質土層
15. 淡褐色砂質土層

西壁



16. 褐色砂質土層
17. 褐色粘質土層
18. 淡茶褐色粘質土層
19. 茶褐色粘質土層
20. 暗茶褐色粘土層
21. 灰色砂層
22. 黑褐色粘土層
23. 暗茶褐色粘土層
24. 棕色砂質土層
25. 暗灰褐色粘質土層
26. 灰色砂層
27. 暗褐色粘質土層
28. 灰褐色砂質土層
29. 黑褐色粘質土層
30. 黑灰色粘質土層
31. 黑灰色粘質土層
32. 暗褐色砂質土層
33. 暗灰色砂層
34. 淡茶褐色砂質土層
35. 茶褐色砂質土層
36. 白灰色細砂層
37. 白灰色粘土層
38. 淡褐色粘質土層
39. 白灰色粘土層
40. 白灰色細砂層
41. 黑褐色粘土層
42. 灰色粘土層
43. 灰色粘質細砂層

第4回 土層断面図

～11層)以下、下記のとおりである。

III層(第15層)は、標高T.P.3.3mを上面とする、厚さ約10cm程度の淡褐色砂質土層である。中世期の堆積層で、この層をベースとして、東西方向の溝1が検出された。

IV層(第19層)は、標高T.P.3.0mを上面とする、茶褐色粘質土層である。ここからは、木製円形盤が出土した他、上面からは溝群(溝2～7)が検出された。

V層(第27・28層)は、暗褐色粘質土・灰褐色砂質土層による厚さ8～15cmの堆積層である。この層をベースとして、溝8等が検出された。

VI層(第34・35層)は、標高T.P.2.4mを上面とする、厚さ約5～14cmの薄い砂質土層である。この層をベースとして、溝9およびピット1基が検出された他、弥生土器・庄内式土器の細片の出土があった。

VII層(第36・37・39・40層)は、層厚30～60cmの含水率の高い白灰色細砂を主体とする層で、調査坑全体に堆積している。上面に同色の軟質の粘土が薄く堆積していることから、砂層堆積後一時的に滞水していた可能性がある。

VIII層(第41層)は、上面の標高がT.P.2.9mの位置にある、層厚約50cmの弥生時代遺物包含層である。遺物は他層出土のものより比較的良好な遺存状況のものもあったが、出土状況に規則性は認められなかった。

IX層(第42層)は、標高T.P.1.6mを上面とする粘土層で、層厚約20cmを測る。上面には、長さ80cm以上、径約15cmの丸太が水平に横たわった状態で検出され、枝払いの痕跡や人為的に切断した痕跡が認められたが、層内に遺物の包蔵は認められなかった。なお、この下層は灰色粘質細砂層であったが、第42層同様遺物は全く認められなかった。

3. 遺構

今回の発掘調査では、東西方向の溝2条、南北方向の溝7条(溝3～9)の計9条とピット2基を検出した。

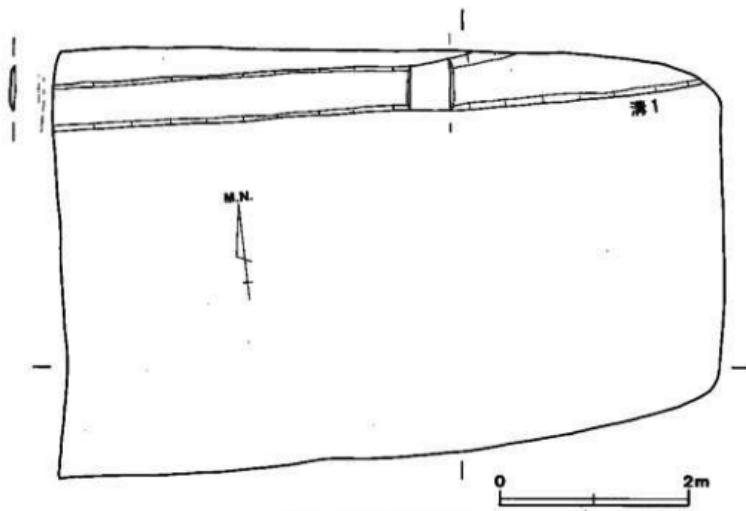
溝1(第5図)

調査区北側を東西方向、方位N-87°-Eに走行する溝である。標高T.P.3.3mの淡褐色砂質土層をベースとし、溝内堆積土は灰色細砂である。幅約25.0cm、深さ3.0cmを測る非常に浅い溝で、東西間の比高差も認められない。溝内からは、弥生土器細片数点が出土したが、いずれも溝底に定着するものではなく、また、上下層から土師質土器が出土していることから、中世期を上限とするものと考えられる。

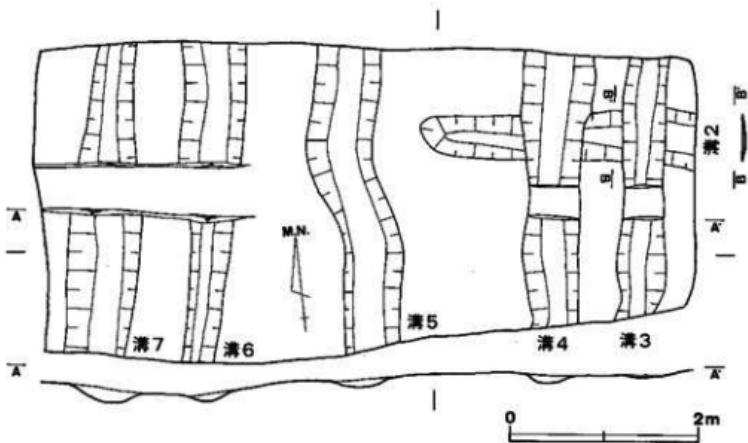
溝2～7(第6図)

標高T.P.3.0mの茶褐色砂質土層をベースとする。

溝2は、調査区北側を中央付近から東へ向かって伸びるもので、方位はN-82°-Wであ



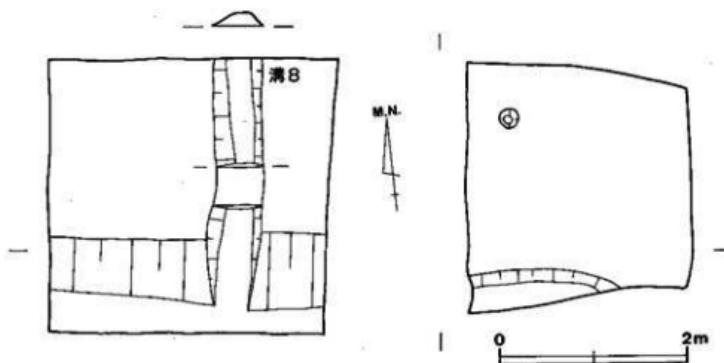
第5図 溝1平面図



第6図 溝2～7平面図

る。幅26.0cm、深さ4.0cmを測る。

溝3～7は、調査区全域を南北方向に併走する溝群で、幅22.0～33.0cm、深さ2.0～4.0cm、方位N7°～10°-Eを測り、中央部で屈曲する溝5を除き、ほぼ直線状に走行する。堆積土は、溝2～7のいずれも褐色砂質土である。これらの溝については、ほぼ同規模、方位、堆積土であることから、同一条件下で機能していた可能性が高い。おそらく耕地における耕作溝の痕跡と考えられる。遺物については、土師質土器および弥生土器の細片が出土した。

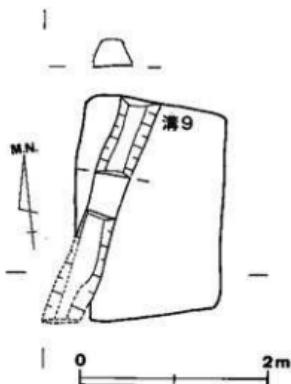


第7図 溝8平面図

溝8(第7図)

標高T.P.2.5mの暗褐色粘質土層をベースとし、淡灰色砂を堆積土とする溝で、調査区西側を南北方向、方位N-7°-Eに走行する。幅27.0cm、深さ7.0cmを測り、南北間での比高差はほとんど認められない。また、調査区東側には径10.5cm、深さ5.1cmの円形のピット1基を検出した。

なお、溝8を切るように、落ち込み状遺構が検出された。調査区の南側で一部分のみの検出だったため、詳細は不明である。検出部分での深さは7.0cmを測り、溝8とほぼ同じ深さであった。



第8図 溝9平面図

溝9(第8図)

茶褐色粘質土・暗茶褐色砂質土層をベースとした南北方向の溝で、方位はN-25°-Eである。調査区中央部で検出され、溝内堆積土は暗灰色砂質土・暗灰色砂である。遺物については、ベース面から弥生土器・庄内式土器の細片数点が出土した。なお、溝の西側に、円形で径6.0cm、深さ18.0cmのピット1基を検出した。遺物の出土はないが、近接しており、溝9との関連が考えられる。

4. 出土遺物

今回の発掘調査では、弥生土器・土師器・瓦器・木製品等が出土したが、わずかな調査面積

ということもあり、殆どの遺物が実測の不可能な細片であった。そのため、形態による区分の不明確なものも非常に多くみられる。ここでは、残存する部位から、各資料の特徴を出土層位別に観察することとした。

1. 土 器

弥生土器をはじめ数十点の土器が出土したが、いずれも細片であり、器表面の磨滅のため、調整等が判別出来ないものも少なくない。

(1) 黒褐色粘土層 [第10図、(1)~(9)]

今回の調査において、弥生土器が最も多く出土した層位である。細片ではあるが、その遺存状況は他層のものより、比較的良好である。

(1)~(5)は壺で、(1)は外弯する口頭部に、平坦な端部を有するもの、(2)は口縁端部外面に粘土を付加して垂下させ、端面に2条の凹線を施すもの、(3)はいわゆる長頸壺である。

(4)、(5)は平底の底部で、(4)には内面に細かいハケメが観られる。

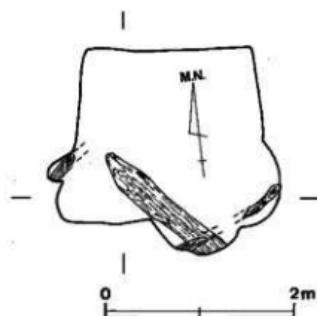
壺(6)は短く外反し、口縁端部に平坦面を有するもので、(7)は平底の底部である。

(8)は上げ底の底部を有する小型鉢である。(9)は高杯杯部で、体部側面に凸帯を持ち、底部外面に縦方向のヘラミガキを施す。

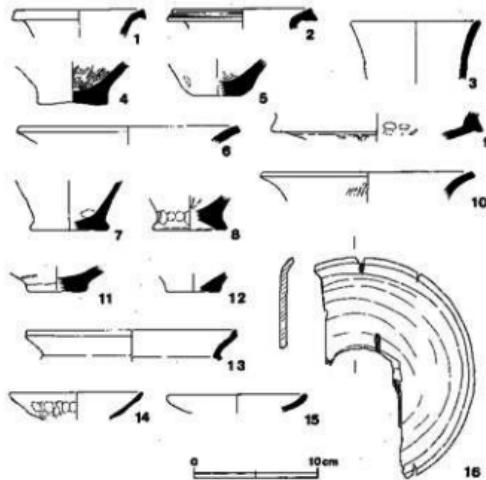
(2) 喰茶褐色砂質土層 [第10図、(10)~(11)]

弥生土器・庄内式土器の破片を出土する層であるが、上述の層と比べて、圧倒的に少なく、実測可能な器種も弥生土器の壺・壺の細片に限定される。

壺(10)は大きく外反する口頭部で、端部は平坦である。外面に縦方向のヘラミガキを有す



第9図 最終検出面



第10図 出土遺物実測図

る。壺(1)は平底の底部である。

(3) 褐色砂質土層 [第10図、(12)～(14)]

この層では、弥生土器・庄内式土器・土師質土器・瓦器等が出土したが、いずれも細片である。

弥生土器の壺(12)は平底の底部である。庄内式土器の甕(13)は、口頸部が屈曲して外反し、端部が尖り気味に立ち上がる。(14)は土師質の小皿である。体部は器壁が薄く、やや内湾気味に立ち上がり、口縁端部は丸い。外面に多くの指頭圧調整痕を残す。

(4) 褐色砂質土層 [第10図、(15)]

(15)は溝4から出土した土師質の小皿で、内湾気味の体部に丸い口縁端部を持つ。

2. 木製品

今回の調査では、土器のほか、比較的多くの木片を出土したが、茶褐色粘質土より直徑18.6cm(復原値)、高さ1.1cmを測る円形盤鏡を検出した。縁は底部から外方向にわずかに立ち上がり、その外面下半には細かい段がある。また、底部内面には回転しながら成形した痕跡が認められた他、底部真ん中に孔を穿った痕跡が観られ、別用途に転用した可能性も考えられる。

5. 小 結

今回の調査では、対象面積30m²とわずかな範囲であったが、遺物包含層・数次の遺構面とともに若干の遺物の出土が認められた。弥生時代については、遺構面の検出は認められず、遺物包含層のみの検出となった。壺(2)、高壙(9)のように、弥生第IV様式以来の特徴を持つものもみられるが、いずれも退化傾向を示しており、また長頸壺(3)の共伴が認められることから、これらの遺物は第V様式を示す資料と考えられる。今回の調査では、中期末(第IV様式)の遺物を出土した昨年度調査地から北へわずか10数mの地点であったが、明らかに中期とする遺物を検出することは出来なかった。しかし、さらに上層の暗茶褐色砂質土層から出土した第V様式の典型的な底部を有する壺(1)と比べ、やや古い様相を残しており、昨年度調査検出の黒褐色粘質土層出土遺物群とほぼ同時期のものではないかと考えられる。なお、上層の暗茶褐色砂質土層からは、少量の細片であるが、弥生土器・庄内式甕の破片を数点出土しており、付近に未検出の庄内期の遺構の存在の可能性も考えられる。

中世期については、数次の層位に東西および南北方向に走行する溝群を検出した。その方位は、南北方向の溝でN-7°～10°-E、東西方向の溝でN-87°-E・N-82°-Wである。南隣の昨年度調査地及びさらに南方に展開する垂水南遺跡における平安末～鎌倉時代の溝・畦畔と方位の点で若干の差異は認められるが、当地は千里丘陵南端に広がる海食崖地形の直下に当たることから、地形の影響による若干の方位のずれを生じながらも、条里制下における水田・畠地經營が丘陵間近まで実施されていた可能性を示すと考えられる。なお、遺物については、細片だが、瓦器・土師質土器等の出土があった。昨年度垂水遺跡発掘調査・大和銀行吹田垂水寮建設に伴う発掘調査出土資料とほぼ同時代のものであった。

第3章 護国寺旧伽藍の調査

1. 位置と環境

護国寺の所在する高浜町一帯は、旧吹田村の中心部であり、地形的には千里丘陵の東南端から神崎川に向かって突出し、半島状の微高地を形成する吹田砂堆の東南端近くにあたる。

吹田砂堆は、千里丘陵の南辺の軟弱な洪積丘陵が海進によって侵食された海蝕崖となっており、独特の緩やかなカーブを描いて吹田方面に展開し、その東端で砂洲状に安威川に突き出て半島状の微高地を形成し、旧吹田村はこの砂堆上に発展した集落である。この吹田砂堆は大阪平野の北東部を形成する淀川低地と西南の大坂低地とを画しており、標高5mを越す吹田砂堆の微高地は、淀川下流域の低湿な平野の中では、非常にきわだった存在であり、集落立地には好条件な地域であった。また、南方を流下する神崎川は古来、三国川と呼ばれ、7世紀末ないし8世紀初めには淀川とは独立した水系として、三島野平野から西摂平野をかすめて流れる一地方河川であったが、延暦4年(785)に淀川と連結する開削工事が行われ、西日本と京都を結ぶ淀川水運の動脈として重要な位置を占めるようになった。そして、三国川が淀川水運の中心となるとともに三国川に面した吹田の地はその港町として発展し、淀川舟運の要衝となり、



第11図 調査地点周辺図 (S=1:5000)

現在も町名として残る「高浜」と呼ばれる津が存在した。

歴史的環境をみると、考古学的知見は旧吹田村をはじめ、千里丘陵東南の沖積平野上では発掘調査の少いこともあり、状況は十分には把握されていない。その中で、豊岡郡条里東限遺跡での縄文時代後期の土器の出土、都呂須遺跡での弥生時代前・中期の土器の出土、そして高浜神社境内地での布留式期の小型丸底壺の出土は注目され、実態は明かではないが、縄文時代、及び弥生時代、古墳時代の遺跡の存在が予想される。

古墳については、千里丘陵東南端部には出口古墳や、多量の埴輪、須恵器、陶棺等の古墳関連遺物を出土した片山公園遺跡があり、ややまとまった古墳群の存在が予想され、時期的に須恵器生産者集団との関連が考えられる古墳群である。

そして、千里丘陵では古墳時代後期には最古段階の須恵器窯跡である32号須恵器窯跡をはじめ6世紀前半から7世紀前半にかけて非常に高い生産密度と規模をもった千里古窯跡群が展開する。そして、この須恵器窯跡群は7世紀前半には急速に衰退していくが、奈良時代後期には聖武朝難波宮造宮瓦窯である七尾瓦窯跡が、平安時代初には平安宮の造宮瓦窯である吉志部瓦窯跡が操業され、窯業地帯として古代窯業史上重要な位置を占める地域である。しかし、沖積平野上では、その時期に対応する遺跡は十分に把握されていない。

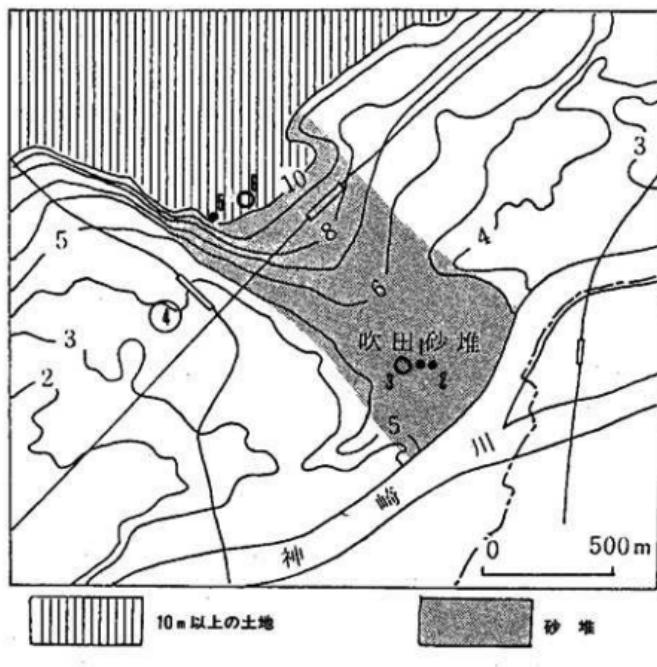
一方、高浜神社境内地では平安時代の軒丸瓦が出土しており、平安宮の造宮瓦窯である吉志部瓦窯跡で焼成されたものであることが判明した。また、都呂須遺跡でも吉志部瓦窯跡で焼成された平瓦片が出土しており、吉志部瓦窯跡以外ではこの一帯での出土が市内唯一の出土例である。資料が限られることから、この地に寺院等が存在するのか、あるいは他の遺跡なのかは明かではないが、この時期は、本地点が、水上交通の要衝として重視されるようになった時期であり、注目される資料である。

そして、淀川水運の要衝として、政治的、経済的に重視されるようになったことを背景の一つとして、平安時代から鎌倉時代には、皇室領吹田御所や清住寺領吹田荘、興福寺領吹田荘、倉殿荘等、皇室、有力寺院、貴族の荘園が営まれている。

また、鎌倉時代には方違の場として、あるいは風光明媚なことから、貴族の別業が営まれたことも、貴族の日記等に散見しており、高浜町付近には西園寺家の別業「吹田殿」の所在も記録されている。

都呂須遺跡では、鎌倉時代の遺構が、多量の遺物をともなって検出されており、屋敷地に関連する遺構と考えられ、中世吹田荘に関連する集落遺跡と考えられる。

近世にはいっても、大坂から京都への交通の要所として重要な位置を占めたことから、戦乱に巻き込まれることも多く、天正10年（1582）に豊臣秀吉から吹田津に対して、3ヶ条からなる禁制が出され、保護政策がとられている。以後も、吹田村は淀川水運の要地として発展していく。

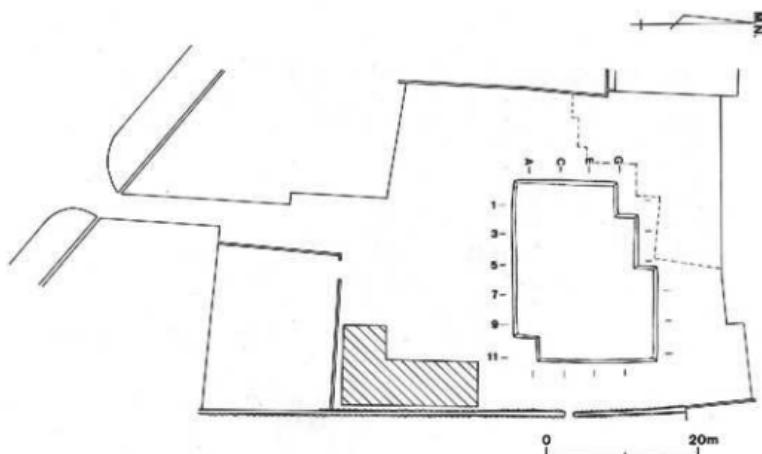


第12図 吹田砂堆概略図（前田井「吹田砂堆」から作成）

2. 調査の経過

発掘調査は、試掘調査の結果に基づいて、護国寺の室町時代創建時、及び江戸時代再建時の伽藍を確認すること、そして下層における創建以前の遺構を確認することを目的とし、408m²の発掘調査区を設定し、昭和63年10月4日から開始した。重機による表土層の掘削後、人力による分層発掘を実施した。調査の結果、江戸時代以降、室町時代、鎌倉時代の3面の遺構面を検出したが、室町時代の護国寺の旧伽藍の一部の基壇を確認するとともに、江戸時代以降、ほぼ同一地点に重なって、再建された基壇を検出した。

基壇の調査にあたっては、基壇の主軸方位にあわせて東西南北にそれぞれ1m間隔の基準線



第13図 調査区平面図

を設定した。(東西L1~L11、南北LA~LG)

平安～鎌倉時代の面では谷状地形、土坑、溝等を検出した。また、包含層中、及び遺構に伴って縄文時代、弥生時代、平安時代、鎌倉時代、室町時代、近世の多量の遺物の出土をみた。

11月6日に現地説明会を開催して、市民に調査の状況を説明し、11月18日に、現地における全ての調査を終了した。



焼失前の護国寺本堂

3. 調査の成果

a. 土層序

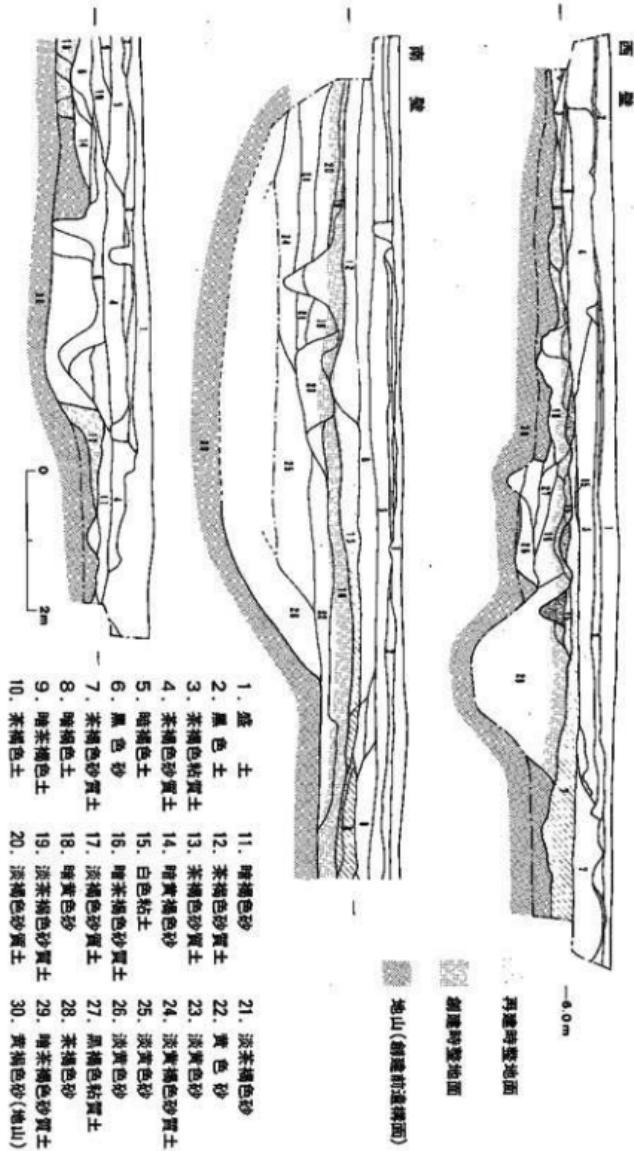
調査区の現地表面は標高6.6～6.7mを前後し、旧吹田村内においては、隣接する高浜神社と共に標高の最も高くなる地点である。基本的な土層序は、表土層(1)は昭和53年の本堂等焼失後の整地層であり、表土層下で認められる黒色土層(2)が焼失時の地表面であり、現在の地表面より15cm下がる。以下、現地表下0.6～0.7mまでは、茶褐色粘質土(3)、茶褐色砂質土(4)、暗褐色土(5)、茶褐色砂質土(7)、暗褐色土(8)、暗茶褐色土層(9)が複雑な堆積を示している。堆積状況をみると白色粘土の広がりや、強く叩き締められた部分があり、さらには礫石と考えられる40～50cmを測る石も認められる。層中からは近世から近代にかけての、瓦、陶磁器等が多く出土し、後世の攪乱が著しいため、明確な面としては捉えられなかったが、近世から近代にかけての遺構面であり、旧伽藍の一部と考えられる。

現地表下0.6～0.7m、標高6.1mで検出した茶褐色砂質土(7)、暗褐色土(8)、暗褐色砂山(1)、茶褐色砂質土(2)、茶褐色砂質土層(9)は比較的ハードな面をなし、基壇の一部を検出している。遺物の出土状況から、護国寺の江戸時代再建時の整地面と考えられる。

再建時遺構面の下層、標高5.9～6.0mにおいて、軟弱な暗黄色砂山(1)、淡茶褐色砂質土層(9)を形成層とする遺構面を検出し、江戸時代の基壇とほぼ重複する地点で基壇を確認した。瓦、陶磁器、土師器皿、瓦質土器等の出土遺物は室町時代全般にわたるものであること、及び基壇上で焼土や炭の堆積が多く認められることから護国寺創建から戦国時代に焼失するまでの整地層と考えられる。また、下層の黄褐色砂層(地山)は起伏の大きな地形をなし、創建に際してはかなり大規模な整地作業を行っている。

地山層、黄褐色砂層は標高4.0～5.0mで検出された精良な砂層である。この砂層はきわめて軟弱で雨水等の出水の影響を大きく受けおり、不定形の土坑、谷状地形、溝等を検出した。上面等からは、鎌倉時代瓦器、土師器皿等の日常雜器を中心し繩文土器(中期)、弥生土器(中・後期)、古墳時代土師器、須恵器、平安時代瓦・土師器甕等長期間にわたる時期の遺物が出土している。遺物の出土状況から鎌倉時代の遺構面と考えられる。黄褐色砂層中から、調査範囲内では遺物の出土は認められなかった。

調査区内の変遷を土層序からみると、基本的に護国寺創建以前、護国寺創建から戦国時代に焼失する時期まで、江戸時代再建時以降の3期にわけられる。護国寺創建以前については、地山層がきわめて軟弱な砂層であることから、雨水等の影響を強く受ける不安定な地であり、起伏の大きな地形を呈していたが、護国寺創建に際して、かなりの規模で整地作業を行っており、以後、建て替えによる地盤の上昇を伴い、現在に至っている。



第14圖 調查區土壤斷面圖

b. 遺構

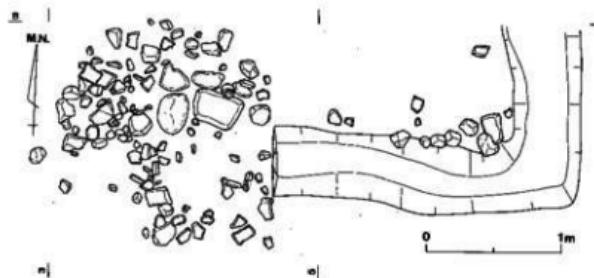
今回の発掘調査で検出した遺構は、護国寺創建以前、室町時代創建時、江戸時代再建時以降と大きく3時期の整地面、及び遺構面を検出した。江戸時代再建時以降については、何時期か建て替えられている可能性が高いと考えられるが、調査区の上層は擾乱が著しく、詳細は明かではない。再建時の遺構は調査区の西半部で整地面、及び一辺30~40cmを測る礎石を確認していることから、堂跡と考えられる。礎石等の状況から建物は調査区の北、及び南方に広がる可能性があるが、後世の擾乱が著しく、規模等の全容は明かではない。以下、創建時、及び創建以前の遺構について述べる。

(1) 護国寺創建時の遺構

基壇

創建時の整地面は標高5.9~6.0mを測り、北側がやや高く、調査区の西半部で基壇を検出した。基壇の平面は方形で、一辺10.5mを測り、西側に東西方向の回廊が取り付く。主軸方位をN-1°-Eにとり、ほぼ磁北と一致する。西北コーナーは調査区外に延び、ほぼ同一地点に江戸時代再建時の伽藍が重複し、北東部分には後世の電が築かれているために、上部がかなり削平されており、遺存状況はあまり良くない。

基壇の周囲には、素掘りの雨落ち溝を巡らしており、南東部では検出されなかったが、幅40~80cm、深さ30~40cmを測る。但し、地盤が軟弱なため、肩部分がえぐられている所もあり、必ずしも直線的には走らない。基壇東側では溝が重複しており、先行する溝は検出された基壇端から1.3mの地点に東側の肩が位置し、この溝が埋まってからその内側に新たな溝が掘られている。先行する溝は西側の肩を掘り込まれているが、幅90cm前後、深さ38cmを測り、基壇南側では東南隅で屈曲して西に伸びるが途中で消える。北側では北東隅で新しい溝と重なっている。溝の検出状況から、先行する溝が当初の雨落ち溝であり、この溝が埋まったためにその内側に新たな溝が掘削されたものと考えられる。



第15図 基壇上面堆積状況

基壇西側で雨落ち溝は、回廊が取り付く部分で、西に屈曲して、回廊に沿って伸びていく。基壇上面の東北隅、及び西南隅には20~30cmを測る自然石の石積の一部が遺存しており、また、周囲に同様の自然石の二次堆積が多く認められることから、自然石を乱石積にした基壇であったと判断される。基壇の高さは、上部がかなり削平されているが、整地面からは平均10cm、雨落ち溝底部からは40cmを測る。

基壇の構築に際しては、地山の起伏が大きいために一部は地表面をそのまま利用し、低い部分には10~30cm黒灰色砂質土を盛り、上部には黒色砂質土を盛り、その面に礎石を据えている。盛り土に際しては、明確な版築は認められないが、上部の黒色砂質土は比較的硬く叩き締められている。基壇の盛り土に並行して、外面に自然石を乱石積にしている。

後世の削平のため、基壇上の礎石は北半部で部分的にしか確認されなかつたが15×20cm~20×40cmを測る自然石を使用している(S 1~S 19)。S 12~S 19については検出状況から、後世のものか、削平にともなって遊離したものであり、遺存した礎石も小規模なものであることや、基壇面が軟弱であることから若干は動いているものと思われる。また、これらの礎石以外には明確な据え付け痕は基壇東端近くで、一ヶ所が確認された。径70cmを測る掘り方に、30×40cmを測る礎石痕が認められる。

東北端で検出した礎石S 1は20cm×40cmを測り、検出した礎石の中では一番大きいが、基壇端に位置することから石積の可能性もある。

S 2~S 11については15×20cm~20×30cmを測り、南北方向にS 2・S 4・S 10が、そしてS 3・S 6・S 9が北から1.2m、0.9mの間隔で、また、S 7・S 8が1.9mの間隔で並ぶ。また、東西方向にはS 2・S 3が1.8mの間隔で、S 4・S 5・S 6・S 7は0.9~1mの間隔で、S 9・S 10・S 11が1.6~1.7mの間隔で並ぶ。

基壇上の建物の構造については、基壇の形態から正方形平面のもである可能性が高いと判断されるが、確認された礎石がわずかであることから断定できない。

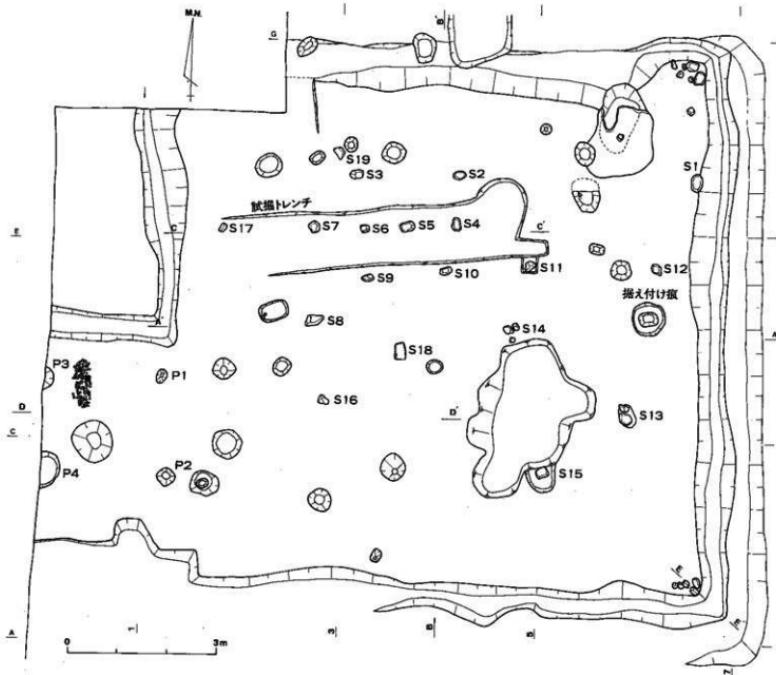
基壇上からは、室町時代前半から後半にわたる時期を中心とする遺物が出土しており、土師器皿、瓦質土器火鉢、陶器擂鉢・甕、中国製磁器、瓦、鉄釘、壁材等が認められる。

また、検出された礎石や石積の大半は被熱しており、基壇上面には焼土、炭等の多量の堆積が認められることから、火災によって焼失したことが判明した。

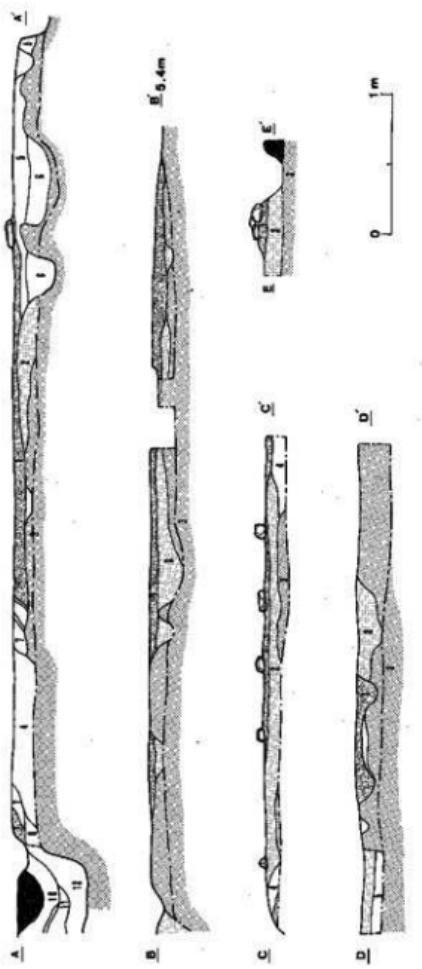
以上のように、出土遺物や火災にあった状況から、検出した基壇は護国寺創建期から戦国時代に焼失する時期にかけてのものと考えられる。

回廊

基壇の西側南半部に取り付く東西方向の回廊であり、幅4.2mを測る。北側には基壇を巡る雨落ち溝が続き、回廊に沿って西へ伸び、幅50~60cm、深さ38cmを測る。回廊も基壇と同様に盛り土されており、北側部分では、整地面からは10~20cm、雨落ち溝の溝底からは48cmの高さがある。上面で検出したP 1~P 4は径20~70cm、深さ4~7cmを測り、東西、及び南北方向



第16図 剥堀時基壠平面図



1. 黑色沙質土
2. 黑灰色沙質土
3. 黃褐色砂(地山)
4. 黃 色 砂
5. 品茶褐色沙質土
6. 黑 色 砂
7. 淡黃褐色砂
8. 品茶褐色土
9. 黑 色 砂
10. 品茶褐色砂
11. 品茶褐色砂
12. 淡茶褐色砂

第17圖 善變部分斷面圖

に並ぶことから、回廊部分の礎石の据え付け痕と考えられる。柱間は東西2.5、南北1.7mを測る。

また、P1、P3間で南北1.0m、東西0.4mの範囲に、径10~18cmの河原石の集積が認められるが、性格は不明である。

(2) 創建以前の遺構

標高4.0~5.0mで検出された黄褐色砂層（地山）をベース面とし、小規模な谷状地形、土坑9基（SK01~SK09）、溝1条（SD01）を検出した。

谷状地形

調査区東半部で検出し、北端近くから南に広がっていき、調査区南端で幅8.3m、深さ1.4mを測り、北端部とは約0.55mの比高差がある。堆積土は淡黄色砂であるが、地山層の2次堆積層であり、北側から流れ込んだものである。堆積土中からは、各層から鎌倉時代を中心とする遺物が出土している。雨水等の北からの流水によって形成されたものと考えられる。

溝（SD01）

調査区東端で検出し、北東から弯曲しながら、南東の調査区外へ伸びていく。幅1.0~2.0m、深さ0.15~0.2mを測る。堆積土は黒色砂質土であり、層中から縄文土器（中期）、平安時代土師器、鎌倉時代瓦器、土師器等が出土しているが、平安時代土師器は検出範囲北端の北側肩部分に据えられた様な状況で出土しており、ほぼ完形である。

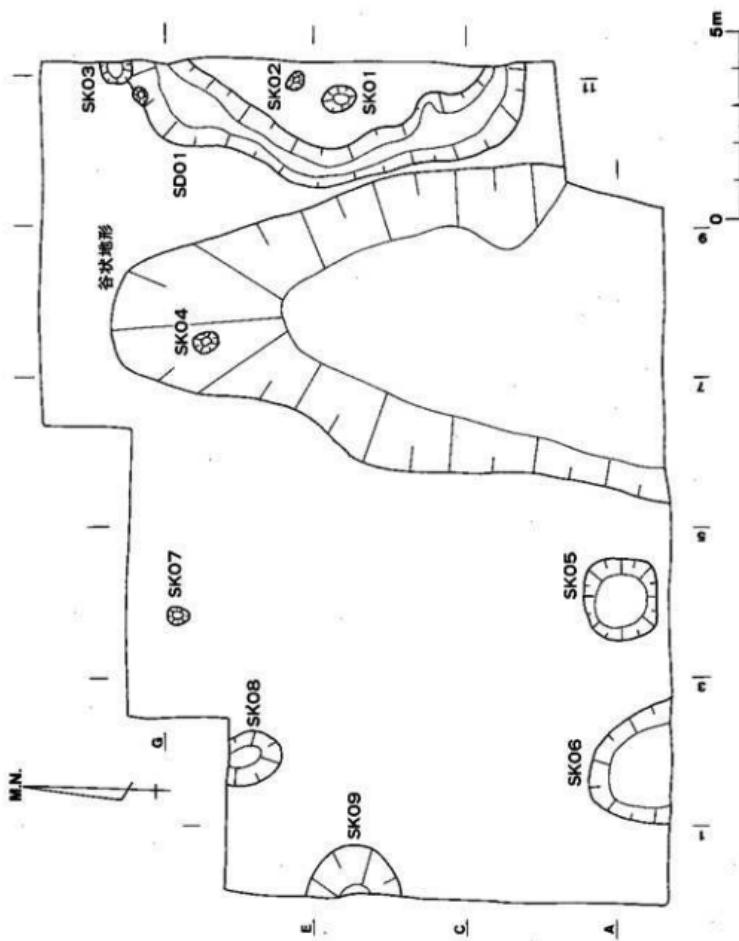
土坑（SK01~SK09）

調査区全体で計9基の土坑を検出した。SK01は径0.7~1.0m、深さ0.2mを測る。堆積土は黒褐色砂質土であるが、堆積土上面に平安時代末期の瓦器、土師器皿等が一括して出土した。他の土坑は径0.3~3.0m、深さ0.2~0.5mを測り、形態、規模等は一様でなく、堆積土は黒褐色砂質土であり、層中からは鎌倉時代の土器の細片が少量出土している。特に人為的な遺構とは考えられない。

c. 出土遺物

今回の発掘調査で出土した遺物は、コンテナで41箱分に及び、鎌倉時代、室町時代の遺物を主に縄文時代、弥生時代、平安時代、近世~近代の遺物が出土している。中世以前の遺物の出土は、創建時から焼失するまでの室町時代を中心とする遺構面（創建時遺構面）、江戸時代再建時の整地層中（上層堆積層）、創建前堆積層に大きくわかる。遺物については、現在整理中であることから、その代表的なものについて述べる。

第18圖 創建前邊緣面平面圖



(1) 創建時造構面出土遺物 (第20図1~4・図版19)

造構面、及び基壇上からの出土遺物である。出土状況は本来の位置を示す資料は認められず、上面に密着した資料である。(1)は青磁碗で口径16.5cmを測り、口縁端部を外反させる。灰白色の胎土にオリーブ灰色の釉が厚く施釉される。上田秀夫氏の分類によるD-II類にあたる。(2)は備前焼の擂鉢で、口径28.2cmを測り、口縁部は上方へ拡張して立ち上がる。内面にはクシ描による擂目が認められる。間壁氏の編年によるIV期の資料である。(3)・(4)は土師器小皿である。(3)は口径10cm、器高1.5cmを測り、底部から口縁部にかけて内弯気味に伸びる。(4)は口径8.8cm、器高1.9cmを測り、体部が押圧によって凹み、口縁部は外反して端部は肥厚する。平安京跡における編年を参考にすると14世紀後半の資料と考えられる。

明確に創建時造構面出土といえる遺物は出土量も少なく、細片が多いが、概ね14世紀後半を中心とし、一部15世紀代の資料が混じる。

(2) 上層出土遺物

江戸時代再建時整地層からの出土遺物であり、調査区全体から遺物の出土が認められるが、大きく攪乱されていることから、細片のものが多い。弥生時代、平安時代から室町時代時代、近世にかけての遺物が認められる。

① 瓦類 (第19図1~11・図版18)

護国寺に関連する遺物としては最も出土量の多い遺物であり、平瓦、及び丸瓦が大半を占めるが、現在整理中であるため、軒瓦についてのみ報告する。

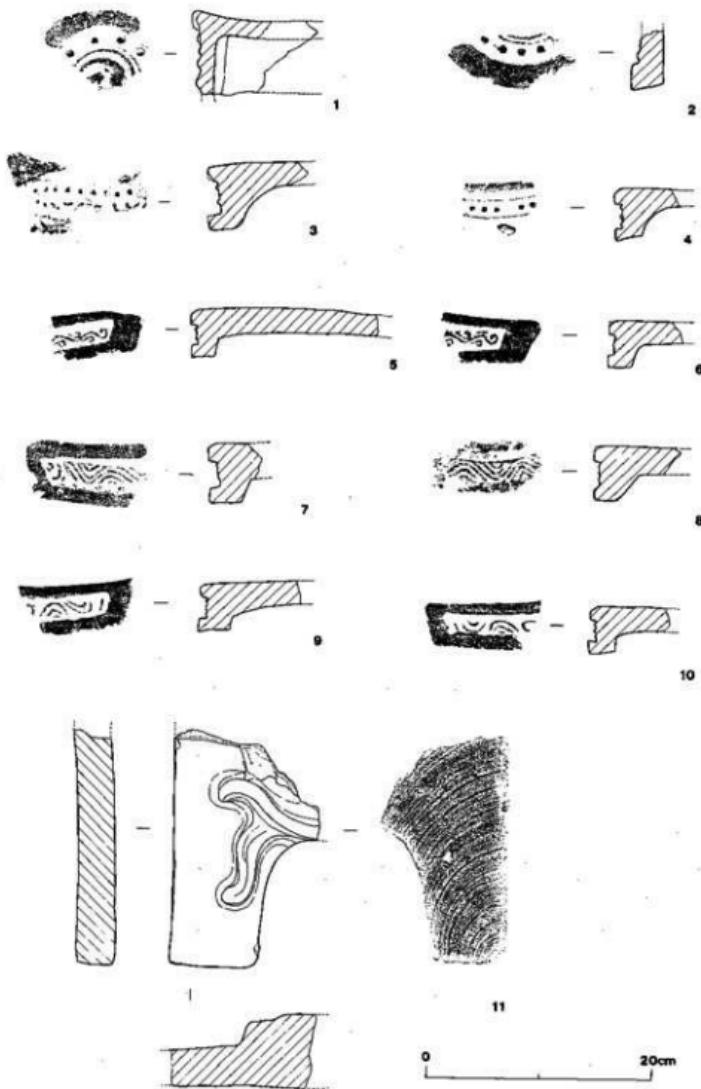
軒丸瓦

2種類が確認されている。(1)・(2)は三巴文軒丸瓦で、(2)は(1)より瓦当径の大きなものである。右回りの尾の長い巴文を内区に、連珠文を外区に配するが、(1)に比べて(2)は連珠文の間隔が密である。ともに周縁は幅が狭く低い。胎土は粗く砂粒を多く含み、(1)は灰色を呈するが、(2)は焼成が悪く浅橙色を呈す。(1)は瓦当裏面と丸瓦接合部分に丁寧なナデ調整を施し、丸瓦部分は縦方向のナデ調整を施す。

軒平瓦

今まで、5種類の範が確認されているが、細片で全容のわかるものはない。(3)は遺存状況が悪いが、唐草文軒平瓦と思われ、上半に連珠文を比較的密に配し、下半に簡略化した唐草文を配した文様構成をとるものと思われる。周縁は広く高い。頭は段頭をなす。平瓦部分凹面には布目压痕が残る。他の軒瓦に比べて古相を呈するものである。

(4)は連珠文軒平瓦で、内区に5mm前後の連珠文を配すが、珠文は2個あるいは3個というよう位があり、等間隔では連なってはいない。頭は段頭をなす。青灰色を呈し、胎土は粗く



第19圖 出土瓦拓影・実測図

黒色砂粒を多く含む。

(5)・(6)は唐草文軒平瓦であり、瓦当面中心部分を欠失しているため詳しく述べられないが、文様は退化気味で外区との界、及び外区に何の文様も配さない。周縁の幅は狭く低い。額は段額をなし、瓦当裏面は横方向のナデ、平瓦部分は縦方向のナデ調整を施す。灰色を呈し、胎土は砂粒を多く含み、粗い。

(7)・(8)は流水文軒平瓦で、内区に(7)は5条、(8)は6条の細い凸線によって構成される流水文を配するものである。周縁の幅は比較的広いが、低い。額は段額をなし、瓦当裏面には横方向のナデ、平瓦部分は縦方向のナデ調整を施す。灰色を呈し、胎土は粗く、砂粒を多く含む。

(9)・(10)は流水文軒平瓦であるが、(7)・(8)を簡略化したものである。細い凸線の組合せによって流水文を表現している。周縁上端はヘラ削りによる面取り調整を行い、周縁の幅は狭く低い。額は段額をなし平瓦部分凸面は縦方向のヘラ削り、凹面はナデで調整を施す。胎土は比較的緻密で、砂粒を多く含む。

(11)は鬼瓦であり、厚さ3.4～3.6cmを測る。

出土した軒瓦については、(3)は他の瓦に比して古い様相が認められ、平安時代末期の可能性が考えられる。(1)・(2)・(4)～(8)・(11)については若干の時期幅があると思われるが室町時代の資料と考えられる。(9)・(10)については他より新しい様相を示す。

② 土器類 (第20・21図5～33・図版19)

土器類 (5～15)

口径14.0～15.0cmを測る皿(5)・(6)、と9.8cm以下の小皿(7)～(15)がある。

(5)・(6)は平らな底部から口縁部にかけて外反気味に伸び、(5)は口縁部近くで肥厚する。(8)～(10)は口径7.8～7.9cm、器高1.4～1.8cmを測り、(7)は口径9.8cm、(15)は7.2cmを測る。平底、あるいは弱い凹底の底部から外反気味に伸び、口縁端部近くで肥厚する。(7)は灰色、他はにぶい橙色を呈し、胎土は砂粒を多く含む。

中国製磁器 (16～25)

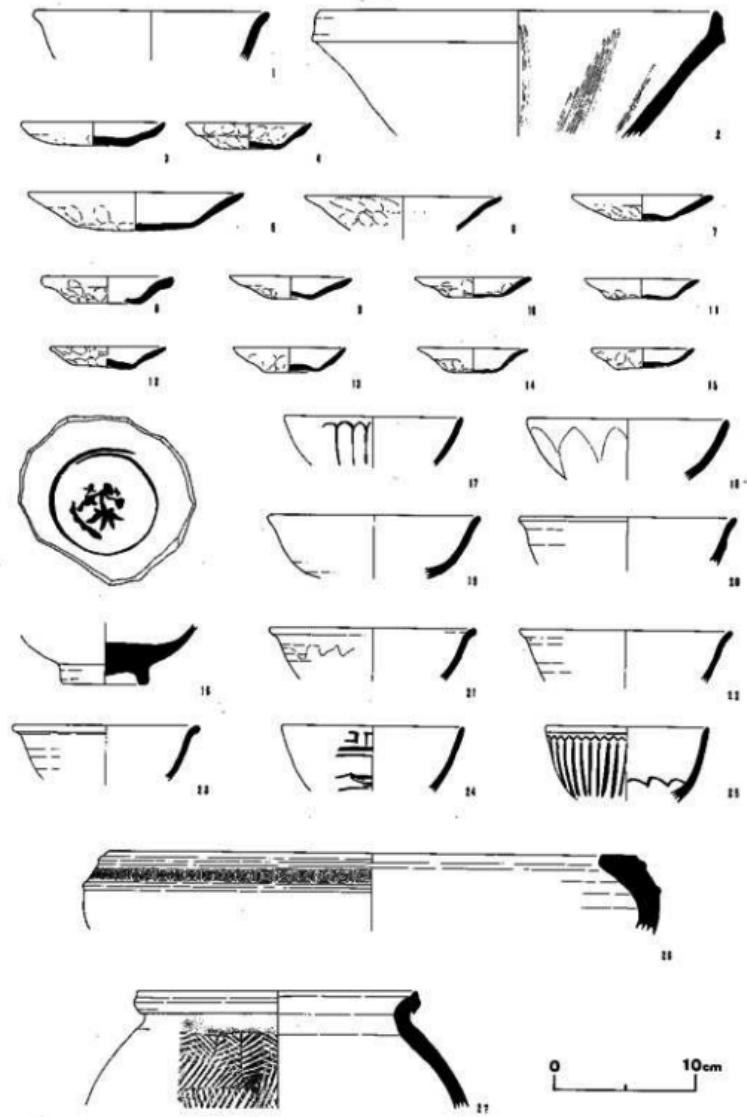
青磁碗であり、(16)は底部片で径5.4cmを測るしっかりした高台をもち、高台内は露胎である。見込部分はヘラの片彫りによる圓線を1条巡らし、草花文を片彫りによって表現する。

(17)は口径12.6cm、(18)は14.0cmを測る連弁文碗である。片彫りによって連弁を表現し、(18)は連弁の幅が広い。胎土は灰白色で、(17)は灰オリーブ色、(18)は緑灰色の釉を厚く施釉する。

(19)～(21)は無文の碗で、(20)～(21)は端部を外反させる。口径は12.9～15.2cmを測り、灰白色の胎土で、オリーブ灰色ないしは緑灰色の釉を厚く施釉する。

(22)は口縁部外面に雷文帯を配する。口径13cmを測り、胎土は灰白色で、明緑灰色の釉を厚く施釉する。

(23)は口径11.4cmを測り、ヘラ先による細線の線描連弁を配するもので、細線と劍頭が連弁と



第 20 圖 出土土器実測図(1)

しての単位を意識するものである。胎土は白灰色で淡緑色の釉を厚く施釉する。他よりやや新しい様相を示す。

出土した青磁碗は上田氏の分類により、(1)はB-II類、(2)はB-III類、(3)はE類 (4)～(7)はD-II類、(8)はC-II類、(9)はB-IV類にあたる。

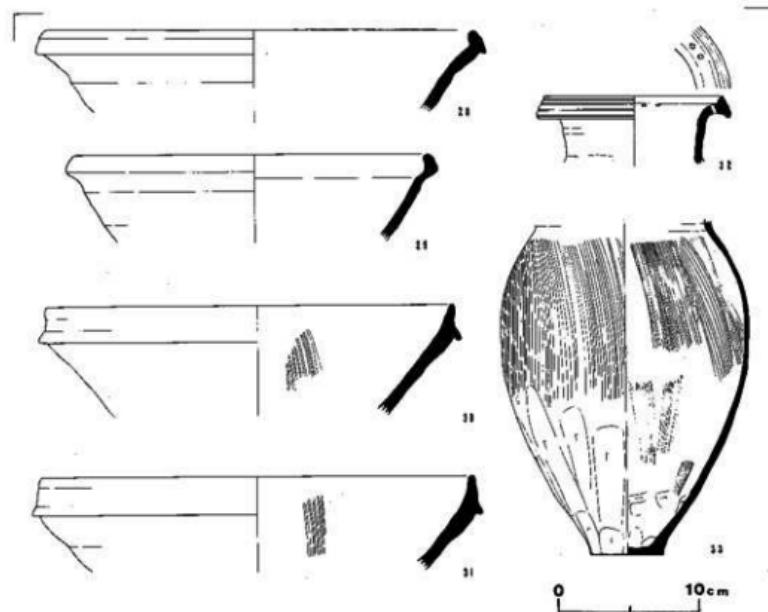
瓦質火鉢 (26)

口径32.6cmを測り、内弯しながら立ち上がる体部をもち、口縁上端は平坦面をなし、内側に突出する。外面上半に凸帯を2条巡らし、その間に押印文を施す。脚の付くものと思われる。

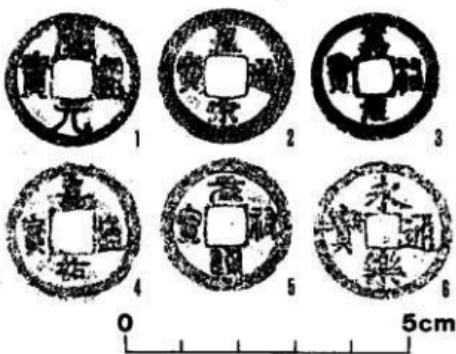
須恵器・陶器 (27～31)

(1)は須恵器の甕で、口径19.6cmを測り、口縁端部を上方、及び下方に拡張する。体部外面は矢羽状の叩き目、内面はナデ調整を施す。(2)・(3)は東播系の捏鉢で口縁端部を上方へ大きく拡張し、(4)は下方にも若干拡張させる。(5)は13世紀後半、(6)・(7)は14世紀後半から15世紀前半にかけての資料と考えられる。

(8)・(9)は備前焼の摺鉢で(2)と同様の資料である。



第21図 出土土器実測図(2)



第22図 出土銭貨拓影

弥生土器 (32・33)

(32)は広口壺の口頸部で、口径12.6cmを測る。口縁端部を上下に拡張して、端面に細い3条の凹線文を付す。口縁端部の少し内に1対の小孔を焼成前に穿つ。におい黄橙色を呈し、胎土は石英、長石等の微砂粒を含む。

(33)は比較的肩の張る壺の体部で、くの字形の口縁部がつくものである。外面上半はハケメ、下半はヘラ削りを、内面はハケメ調整を施す。浅黄色を呈し、胎土は石英、長石等を多く含む。

(32)、(33)はIV様式の資料である。

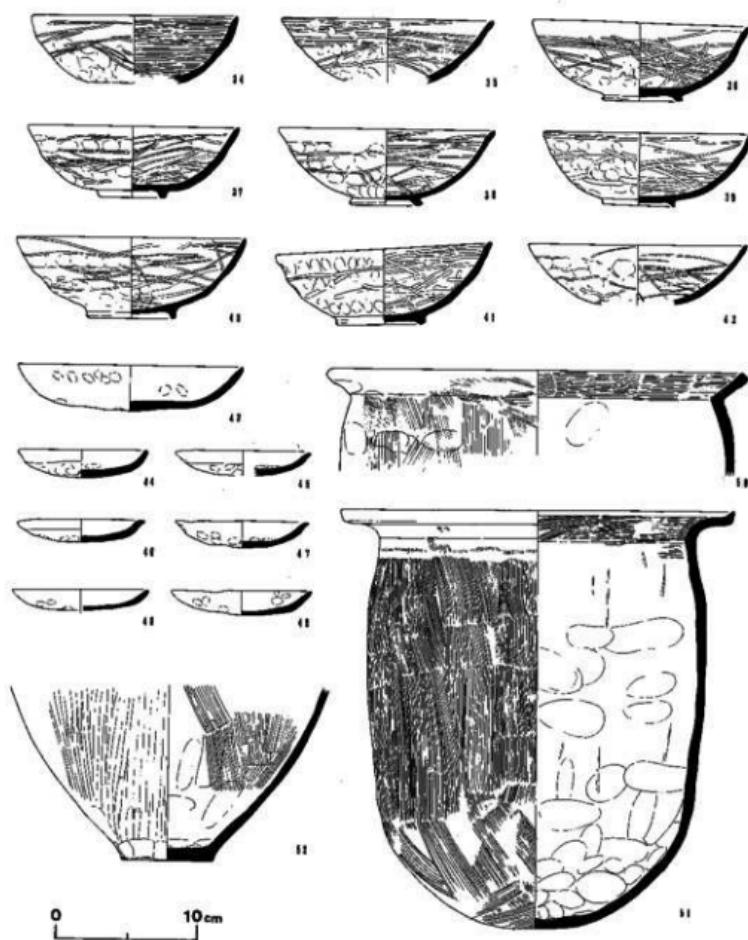
銭 貨 (第22図1~6・図版19)

(1)は開元通宝で径2.51cmを測る。621年初鋤である。(2)は皇宋通宝で径2.3cmを測る。1039年初鋤である。(3)は嘉祐元宝で径2.34cmを測る。1056年初鋤である。(4)は嘉祐通宝で径2.45cmを測る。1056年初鋤である。(5)は元祐通宝で径2.39cmを測る。1086年初鋤である。(6)は永樂通宝で、径2.51cmを測る。1408年初鋤である。

(1)は唐銭、(2)~(5)は北宋銭、(6)は明銭である。

(3) 創建前堆積層

地山層である黄褐色砂層上面、及び土坑等の出土遺物であり、縄文時代中期、弥生時代、平安時代、鎌倉時代の遺物が認められる。



第23図 出土土器実測図(3)

① 土器類（第23図34～52・図版20）

瓦器碗（34～42）

(34)は楠葉型であり、他は和泉型の範疇に含まれるものである。(34)は口径14.6cmを測り、外面は口縁部にやや粗く3分割してミガキを施し、内面は丁寧に行っている。見込はジグザグ状のミガキを施す。橋本編年のII—3型式にあたる。(35)～(38)は口径14.8～16.2cm、器高5.1～5.7cmを測る。口縁部は横ナデのため外反気味のものが認められる。外面は粗く、内面は比較的丁寧な横方向のミガキを施している。見込部分は(35)はジグザグ状、(36)は不定方向、他は平行線状のミガキを施す。高台はしっかりとおり、強くふんばるものが多いが、強いヨコナデによって断面が三角形に近いものも認められる。

土師器皿（43～49）

口径から皿と小皿の2種類に分けられる。皿(43)は口径16cm、器高3.2cmを測る。平らな底部から口縁部にかけて内弯気味に伸びる。(44)～(47)は小皿で、口径9.0～9.6cm、器高1.6～2.0cmを測る。(48)～(49)は平らな底部から口縁部にかけて外反気味、あるいは外上方へ伸びる。(48)・(49)は内弯気味に伸びる。にぶい橙色を呈し、胎土は微砂粒を多く含む。

瓦器碗(34)～(38)、土師器皿(43)～(49)は調査区東端で検出したSK01の一括資料であり、12世紀後半代の資料である。

土師器壺（50・51）

口径28.0・29.4cm、器高は(50)が29.7cmを測る。(50)は口縁部をくの字状に伸ばし、(51)は口縁部をほぼ水平に伸ばし、端部を上方へつまみ上げる。外面は縦方向の、口縁部内面は横方向のハケメ調整を施す。(50)は外面に煤が付着する。平安時代初の資料である。

弥生土器

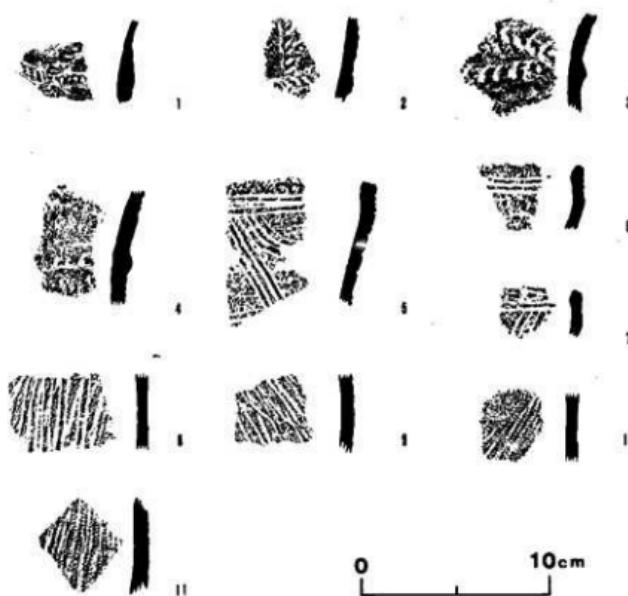
(52)は壺の体部下半で、外面は縦方向のヘラミガキ、内面は縦方向のハケメ調整を施す。内外面とも丁寧な調整である。にぶい黄橙色を呈し、胎土は石英、長石、赤色酸化鉄を含む。外面に煤が付着する。IV様式の資料である。

縄文土器（第24図・図版21図）

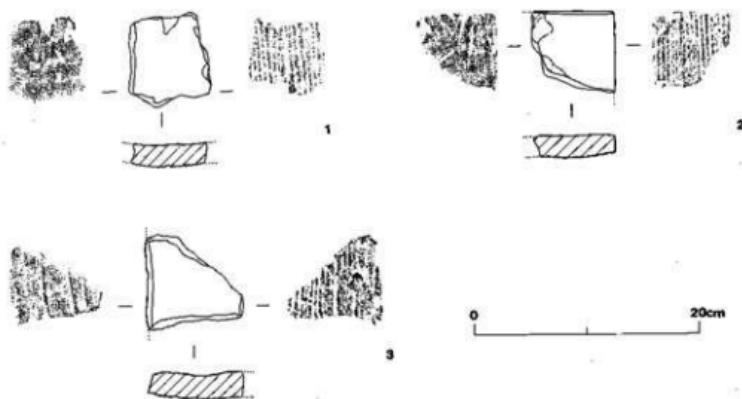
(1)～(4)は貼付け凸帯を施し、凸帯の頂部全体に半截竹管による爪形刺突文を加え、(3)は凸帯以外にも竹管文を施す。

(5)～(9)は半截竹管による平行線文を施し、(5)～(7)は口縁上端にヘラ状工具で外と内から交互に刺突を加えている。

(10)・(11)は縄文の条を浅深をつけて施したものである。いずれも、中期船元式の特徴を有するもので、里木貝塚における編年に従うと、(1)～(4)はII式A類、(5)～(9)はIII式A類、(10)～(11)はIV



第24図 繩文土器拓影・実測図



第25図 吉志部瓦窯焼成瓦拓影・実測図

式にあたるものと思われる。

② 瓦類（第25図1～3・図版19）

3点とも平瓦の細片であり、各々厚さ2.0cmを測る。胎土は石英を主とし、砂粒を多く含んで粗く、焼成は須恵質に近い。凸面は縦位の繩叩き目を施し、凹面には布目圧痕を残す。(3)は凹面に幅1.2～2.3cmの横骨痕が認められる。側面はヘラ削りにより面取りしている。胎土、及び調整手法等から、これらの瓦は平安宮造宮瓦窯である吉志部瓦窯跡の製品である。

4. まとめ

今回の護国寺旧伽藍の調査は、本市における初の中世寺院の発掘調査であるとともに、護国寺創建前の遺構面の状況や出土遺物から、吹田砂堆上における環境の変遷の一端を把握することを可能にした調査であった。

付表1 出土遺物観察表

No.	器種	法量	個々の特徴	出土層位	色調
3	土師器小皿	口径 10.5cm 器高 1.5cm	口縁部は内弯気味に伸びる。 底部押圧調整、他は横ナデ、ナデ。砂粒若干含む。	創建時遺構面	淡橙色
4	土師器小皿	口径 8.8cm (復元) 器高 1.9cm	押圧調整後、口縁部横ナデ、 胎土密。	創建時遺構面	内外 にぶい橙色 断褐色
5	土師器皿	口径 15.2cm (復元) 器高 2.7cm	口縁部は外反気味に伸びる。 底部押圧調整、他は横ナデ、ナデ。胎土密。	暗褐色砂層 (上層堆積層)	内外 にぶい橙色 断褐色
6	土師器皿	口径 14.0cm (復元)	口縁部横ナデ。 胎土密。	茶褐色砂質土 (")	にぶい橙色
7	土師器小皿	口径 9.8cm (復元) 器高 1.8cm	体部が押圧によって凹み、口縁部は外反して伸びる。 胎土密。	茶灰色砂質土 (")	灰色
10	土師器小皿	口径 8.0cm 器高 1.45cm	口縁部をやや肥厚させる。 胎土密。	灰色砂質土 (")	にぶい橙色
12	土師器小皿	口径 8.1cm 器高 1.6cm	底部がやや凹む。 細砂粒含む。	灰白色砂質土 (")	にぶい橙色
15	土師器小皿	口径 7.2cm 器高 1.5cm	体部が押圧によって凹む。 胎土密。	茶灰色砂質土 (")	にぶい橙色

No	器種	法量	個々の特徴	出土層位	色調
34	瓦器碗	口径 14.6cm (復元)	外面は粗く、内面は密なヘラミガキ。 見込部分ジグザグ状のミガキ。	SK01 黒色砂質土	内外暗灰色 断 灰白色
35	瓦器碗	口径 15.2cm (復元)	内外面、粗いヘラミガキ。 見込部分ジグザグ状のミガキ。	SK01 黒色砂質土	内外暗灰色 断 灰白色
36	瓦器碗	口径 15.4cm 器高 5.7cm 器高指数 37.0	外面、粗いヘラミガキ。 見込部分平行線状ヘラミガキ。	SK01 黒色砂質土	内外灰色 断 灰白色
37	瓦器碗	口径 14.8cm(復元) 器高 5.1cm 器高指数 34.5	口縁端部弱く外反する。 内外面粗いヘラミガキ。 見込部分平行線状ミガキ。	SK01 黒色砂質土	内外暗灰色 断 灰黄色
38	瓦器碗	口径 15.4cm(復元) 器高 5.4cm 器高指数 35.1	口縁部弱く外反する。 外面粗いヘラミガキ。 見込部分平行線状ミガキ。	SK01 黒色砂質土	内外暗灰色 断 灰白色
39	瓦器碗	口径 14.9cm 器高 5.2cm 器高指数 34.9	外面粗く、太いヘラミガキ。 見込部分平行線状ミガキ。	SK01 黒色砂質土	灰色
40	瓦器碗	口径 16.2cm(復元) 器高 5.7cm 器高指数 35.2	内外面粗いヘラミガキ。 見込部分不定方向のミガキ。	SK01 黒色砂質土	内外黒色 断 灰白色
41	瓦器碗	口径 15.4cm 器高 5.8cm 器高指数 37.7	内外面、粗く太いヘラミガキ。 見込部分に十字のヘラ描が認められる。	SK01 黒色砂質土	内 灰色 外 灰色 断 灰白色
42	瓦器碗	口径 15.6cm (復元)	内外面、粗く細いヘラミガキ。	SK01 黒色砂質土	内外暗灰色 断 灰白色
43	土師器皿	口径 16.0cm 器高 3.2cm	口縁部は内弯気味に伸びる。 底部押圧調整、他は横ナデ、ナデ。胎土密。	SK01 黒色砂質土	浅黄橙色
44	土師器小皿	口径 9.2cm 器高 2.0cm	口縁部は直線的に外上方へ伸びる。 底部押圧調整、他は横ナデ、ナデ。	SK01 黒色砂質土	にぶい橙色
46	土師器小皿	口径 9.0cm 器高 1.6cm	口縁部は外半気味に伸びる。 底部押圧調整、他は横ナデ、ナデ。	SK01 黒色砂質土	にぶい橙色
49	土師器小皿	口径 10.0cm 器高 1.75cm	口縁部は内弯気味に伸びる。 底部押圧調整、他は横ナデ、ナデ。	SK01 黒色砂質土	にぶい橙色

調査では、調査区の西半部において昭和53年に焼失した本堂とほぼ同一地点で近世以降の基壇を、そしてその下層で室町時代創建時の基壇を確認した。

近世の基壇については創建時基壇の直上で、後世の擾乱のために規模等は明らかにできなかったが、出土遺物や基壇形成土中に焼土、炭を含むことから江戸時代再建時と考えられる基壇を検出した。そして、堆積状況から、江戸時代再建時から現代までの間に、近世において少なくとも、もう1時期大きな建て替えが行われた可能性がある。

護国寺創建時

護国寺創建時の遺構としては、一辺10.5m（35尺）を測る方形の基壇を確認したが、軟弱な砂堆を地盤としており、さらには、江戸時代再建時に礎石を抜き取る等、基壇面を擾乱していることから、遺存状況は良好ではなかった。

基壇の構築に際しては、地山面が軟弱な砂層であり、谷状の地形が認められる等起伏の大きな地形であることから、かなりの規模で整地作業を行ったものと考えられるが、基壇自体の構築については、特に地業は行っていない。基壇の構築は地山面を利用しているが、地山面の起伏が大きいために、低い部分に砂質土を盛っており、さらに基壇上面全体に黒色砂質土を盛って、比較的硬く叩き締めている。禅宗寺院に通有に認められるように、基壇上面を石または瓦で四半敷としたか、土間であったかは明らかでない。

基壇の側面は、一部にしか遺存していないが、自然石の乱石積であり、その状況からみると、基壇は低いものである。

基壇の周囲にはかなりの部分が削平されているが、特に配石、瓦敷等で雨落ち溝はつくらず、基壇端から1.3mの地点にゆるやかな溝の端があり、その部分に軒先がくるものと考えられる。また、基壇の北、東、及び南側では雨落ち溝が重複しており、内側に排水溝が掘削されているが、基壇の検出状況より考えて、当初の雨落ち溝が埋まったために、新たに内側に基壇に接して掘削されたものと考えられる。

基壇上の建物については、遺存している礎石や据え付け痕がごく限られるために、断定はできないが、基壇の平面形態から正方形平面の建物であった可能性が高い。

従って、検出した基壇の形態から、当寺が禅宗寺院であることを考慮し、また、関連する史料はないが、近世以降、現代に至る跡がこの基壇とほぼ重なる位置に建てられ、昭和53年に焼失した本堂が位置することから、伽藍配置が大きくは変化していないであろうと考えると、今回検出した建物跡は仏殿である可能性が高い。

調査区内では基壇以外には、他の明確な創建時の遺構は検出されておらず、基壇の西側南部分に西に伸びる回廊が検出されが、伽藍配置等については今後の調査を待たなければならぬ。

護国寺創建時に関連する遺物についてみると、瓦類が最も多く出土しており、平瓦、及び丸瓦が大半を占める。軒瓦については、包含層からの出土であるが、軒丸瓦は三巴文軒丸瓦が2

種類、軒平瓦は連珠文軒平瓦、唐草文軒平瓦、流水文軒平瓦3種の計5種類が確認されている。

若干の時期幅が考えられるが、四天王寺等における調査成果を参考にすると、概ね室町時代の資料と考えられ、創建時の葺瓦と考えられる。但し、流水文軒平瓦(9)・(10)はより簡略化された流水文であることから、後出する可能性があり、再建時の瓦とも考えられる。

土器については、14世紀後半のものが多く、16世紀前半にかけてのものが認められる。土師器皿が最も多く出土しているが、中国製磁器は都呂須、藏人遺跡等の市内中世遺跡におけるよりも、全体に占める割合が多い。

創建前

護国寺創建前については、地山面で谷状地形、土坑、溝等を検出したが、明らかに人為的な遺構と考えられるのは、土坑S K01、溝S D01のみであり、他は、雨水等の流水によって形成されたものと考えられる。SK01、SD01とも、調査区の東端で検出されたために、その性格は明かではないが、出土遺物よりSK01は平安時代末、SD01は鎌倉時代のものと考えられる。検出状況からさらに東方に遺構群が展開していく可能性がある。

出土遺物については、いくつか注目すべき点が認められる。

上層の包含層からの出土であるが、平安時代末期と考えられる軒平瓦(3)は、SK01の出土遺物と対応する時期のものである。瓦が1点のみであることから断定はできないが、SK01の存在により、平安時代末期の遺構が存在することは確実であり、護国寺創建前の寺院の存在を想定させる資料である。護国寺創建に際しては、それに先立つ伽藍の存在が推測されるが、資料がきわめて限られるために、今後、十分に検討していただきたい。

SK01の出土遺物は瓦器椀、土師器皿の一括資料であり、瓦器椀は橋本編年、II-3形式の楠葉型瓦器椀1点を含み、他は和泉型の範疇に含まれるものであり、調整等は各個体で異なるが12世紀後半の資料である。市内の中世遺物については、層序的に捉えられる一括の資料が少なく、今後の編年作業において重要な資料となる。

また、他にも13世紀代の瓦器、土師器皿等が多く出土しており、周辺では西方200mの都呂須遺跡で13世紀後半期の遺構が確認されていることから近接地に中世集落の存在が予想される。

これについては、吹田莊にはまとまった莊園集落の存在が予想され、当地に存在が推測される中世集落も、莊園集落との関連が考えられる。

平安時代の瓦については、本市岸部北5丁目に所在する、平安宮造宮瓦窯である吉志部瓦窯跡で生産されたものであることが判明したが、東接する高浜神社境内からは軒丸瓦が、西方の都呂須遺跡からは平瓦片が出土し、市域では瓦窯跡以外では一帯が吉志部産瓦の唯一の出土資料である。当該期の寺院跡が存在するかどうかは、これだけの資料では断定できないが、SD01から平安時代初の土師器甕跡がほぼ完形に近い状況で出土しており、近接地に当該期の遺跡

の存在が考えられるが、当地一帯が三国川と淀川の連結工事の完成によって水運上の要地として重要度を高める時期であり、注目すべき資料である。

弥生土器は攪乱した状況で各層から出土しているが、IV様式を中心とするもので、一部V様式のものが認められる。遺存状況は良好で、まったくローリングは受けていない。都呂須遺跡においても破片ではあるが、良好な状況のI様式新段階、及びII様式の資料が出土しており、周辺に、前期から中期末、そして後期にかけての集落の存在が予想される。本市では千里丘陵南端上の垂水遺跡が中期末を盛期とする大規模な遺跡として知られていたが、南方の沖積平野上では垂水南遺跡、蔵人遺跡、五反島遺跡等、V様式の遺物を出土し、垂水遺跡に後続すると考えられる遺跡は認められるが、同時期の遺跡はわかっていない。一方、千里丘陵東方の沖積平野上では調査が進んでいないこともあり、明かではなかったが、今回の調査によって、比較的の近距離に同時期の遺跡の存在が想定され、両者の関連が注目される。但し、今回の調査、及び都呂須遺跡では遺物が出土しているのみで、遺構は確認されていないことから、詳細な検討は今後を待たなければならない。

縄文土器は、地山上面からの出土であり、遺存状況は良好であるが、平安時代末から鎌倉時代にかけての遺物と混在した二次堆積の資料である。破片ではあるが、計50点出土しており、全て中期の船元式土器であり、周辺では豊島郡条里東限遺跡で後期の土器が1点、七尾瓦窯跡下層遺跡では晩期の船橋式土器が出土しているが、今回の資料が市内では最も遡る例である。丘陵南方の沖積平野上の豊島郡条里東限遺跡では1点のみの出土であったが、今回は破片ではあるが、まとまって出土しており、遺跡の存在も推測される。

以上のように、今回の発掘調査では護国寺創建時の仏殿と考えられる建物跡を検出することにより、創建時の状況を確認するとともに、以後、近世から現代に至る伽藍の変遷の一端を明らかにした。

創建前の状況については、縄文時代中期、弥生時代、平安時代初期、平安時代末期、そして鎌倉時代の遺物の出土から、多くの成果を挙げることができたが、一部しか遺構は伴わず、出土遺物からの想定であることから、多くの課題を残すものであり、今後の調査において慎重に検討していきたい。

基壇の復元

創建時の基壇については、大きく削平されていることから建物の断定はできないが、確認された礎石、及び礎石据え付け痕、そして回廊の状況等をもとに、建物の復元を試みたい。

基壇の東北端近くで検出されたS1については、その規模、及び形態からは礎石の可能性が考えられるものであるが、基壇の状況から考えると、基壇周囲の石積みの一部である可能性が高い。しかし、他の石積みに使用された石とはかなり異なることから、回廊等の礎石の可能性も考えられるが、その場合、東方に建物を想定することとなる。

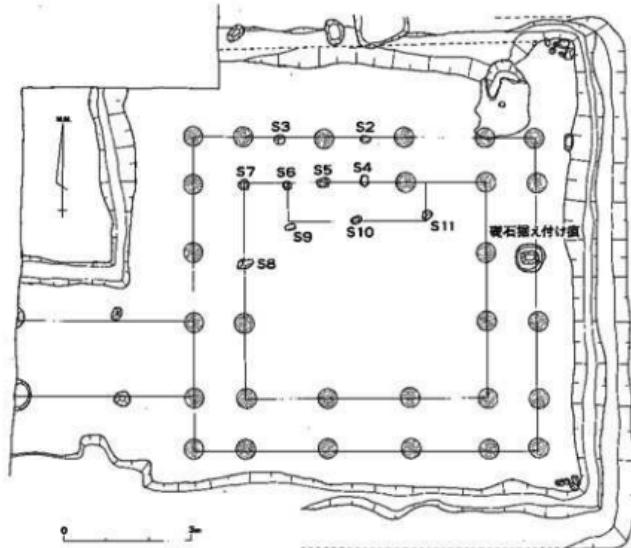
基壇東側で検出された礎石据え付け痕、及び北側の礎石S2、S3は当初の雨落ち溝から

各々、2.1m（7尺）でほぼ同様の間隔を測ることから対応することが考えられ、側柱の可能性が考えられる。そして、以上の点、及び回廊の状況を考慮して復元したのが第26図であり、南面する方三間裳階付の仏殿を想定した。S2、S3については側柱の位置から半間ずつずれることから間柱的なものであり、基壇自体がそれほど堅固なものではないことから設けられたものと考えた。そして、S5、S7、S8を主屋部分の入側柱と想定し、柱間南北1.7（5.7尺）、東西1.9m（6.3尺）を測り、桁行5.7m（19尺）、梁間5.1m（17尺）を測る主屋と、その周囲を幅1.2m（4尺）幅の裳階を巡らす。純桁行8.1m（27尺）、梁間7.5m（25尺）を測り、軒の出は1.5m（5尺）が想定される。

また、S4、S6、S9～S11については、背面入側柱列から前方に0.9m（3尺）離てた桁行通りに、梁間通りから半間ずらして主屋の中央に、主屋柱2間分に礎石が並ぶことから、奥行0.9m（3尺）、幅3.3m（11尺）の規模の須弥壇を想定した。

なお、昭和53年に焼失した本堂は近世の再建と考えられ、創建時の基壇の位置とほぼ重なり、東側に庫裏、西側に観音堂を配した。本堂の構造については、検出した基壇とほぼ同様の規模で、方三間裳階付の仏殿様式の建物であったことを住職の中野哲夫氏から教示を受けた。

以上のように、検出した創建時の基壇上の建物の平面形態について復元を試みたが、確実な根拠となるものが限られ、さらに、遺存していた礎石が側柱としては小規模である等、問題が多く、この推定復元案は1つの案として今後、さらに検討していきたい。



第26図 基壇復元図

〔参考文献〕

第 2 章

- 吹田市教育委員会『昭和55年度埋蔵文化財緊急発掘調査概報』1980年
吹田市教育委員会『昭和62年度埋蔵文化財緊急発掘調査概報』1988年
網干善教編『吹田市史第8巻(別編)』1981年
中西端人他『龜井遺跡』(財大阪文化財センター)1983年
広瀬和雄他『龜井遺跡(その2)』大阪府教育委員会・鶴大阪文化財センター
愛知考古学談話会『第3回東海埋蔵文化財研究会 欠山式土器とその前後研究・報告編』1987年
伊藤曉子他『畿内の弥生土器』『弥生時代の研究』
関西大学・吹田市史編纂室『垂水遺跡第1次発掘調査概報』1975年

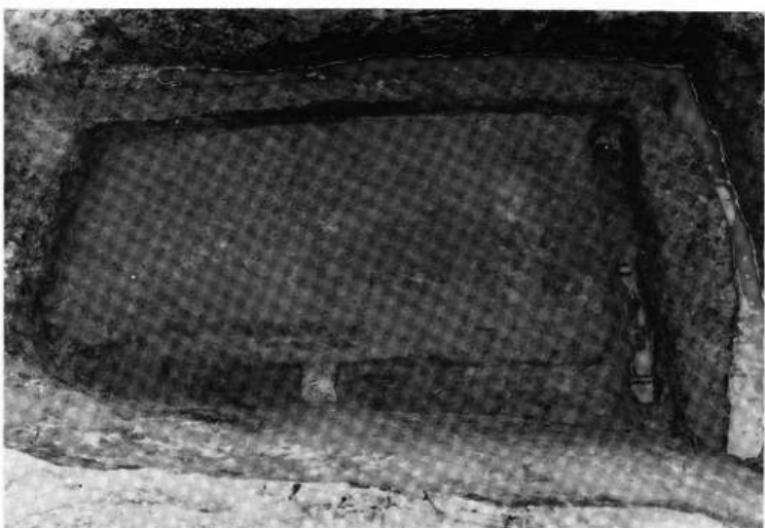
第 3 章

- 夏 節『吹田志稿』1976年
吹田市史編纂委員会『吹田市史第2巻』1975年
前田 畏『吹田砂堆』『吹田の歴史』1974年
四天王寺文化財管理室編集『四天王寺古瓦集成』1986年
中世土器研究会『中・近世土器の基礎研究1~4』1985~1988年
横田洋三他『平安京跡研究調査報告第12輯』古代学協会 1984年
橋本久和『上牧遺跡発掘調査報告書』高槻市教育委員会 1980年
間壁彦彦・間壁茂子『備前焼研究ノート1~4』『倉敷考古館研究集報1・2・5・18号』倉敷考古館 1966・1968・
1984年
上田秀夫『14~16世紀の青磁の分類について』『貿易陶磁研究No.2』貿易陶磁研究会 1982年
間壁彦彦・間壁茂子『里木貝塚』『倉敷考古館研究集報7号』倉敷考古館 1971年

図版一 垂水遺跡調査前近景・遺構検出状況(1)

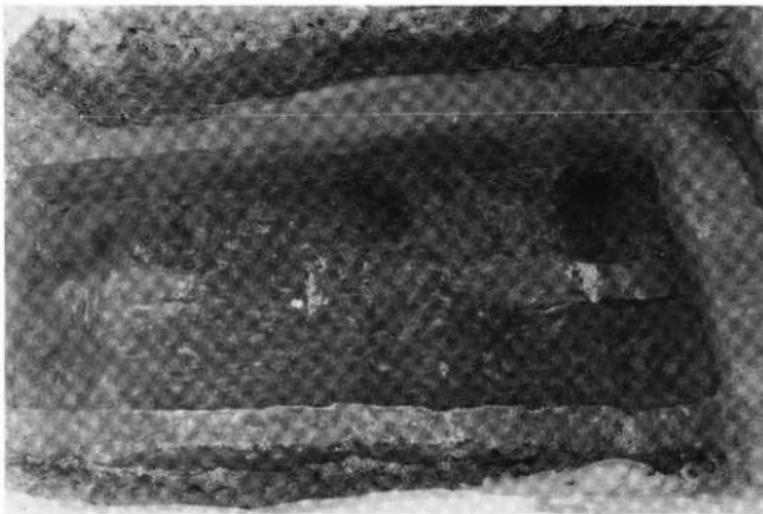


調査前近景(東から)

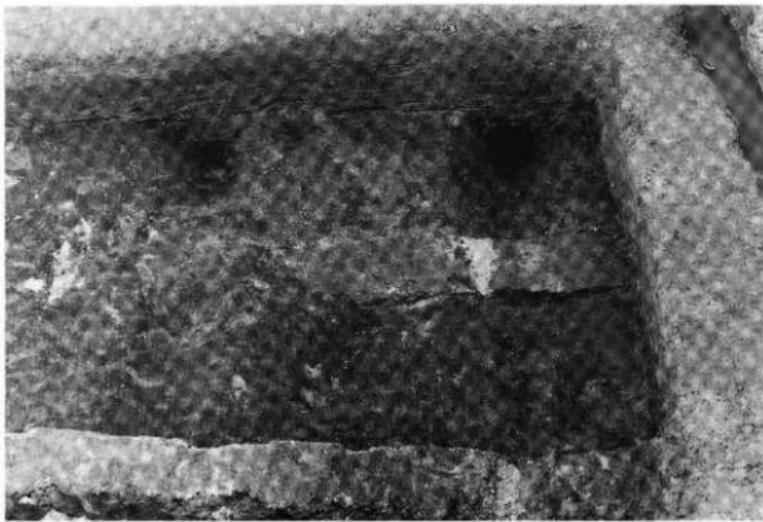


溝1(北から)

図版二 垂水遺跡遺構検出状況
(2)



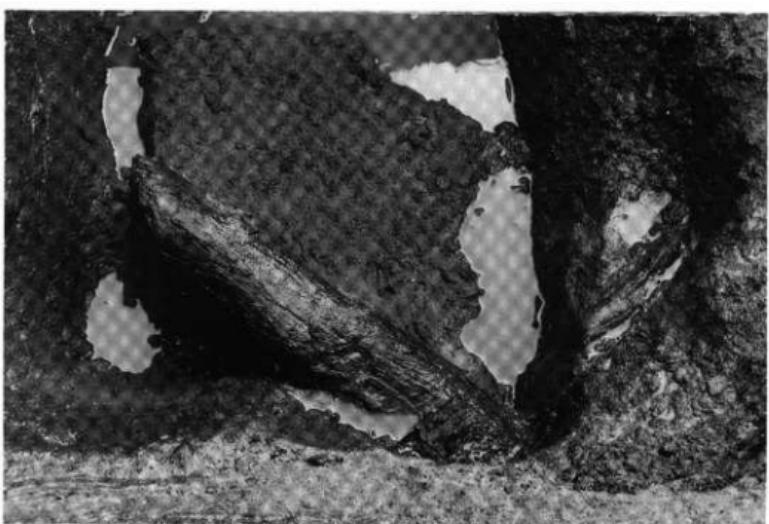
溝2-7(北から)



溝5-7細部(北から)



図8(西から)



丸木棟出状況(南から)

図版四 垂水遺跡調査状況

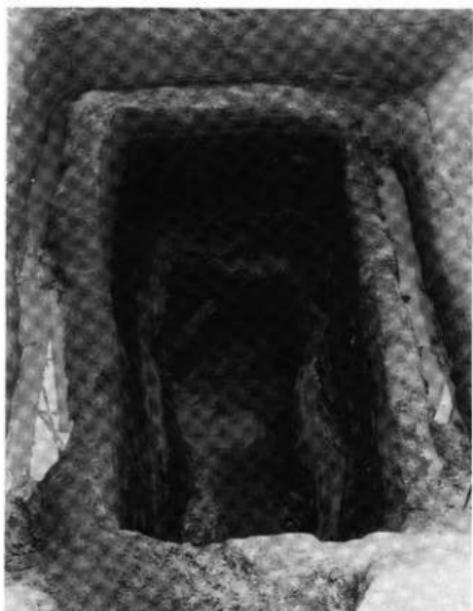


丸木検出状況細部



南壁断面

図版五 垂水遺跡 調査状況・遺物出土状況

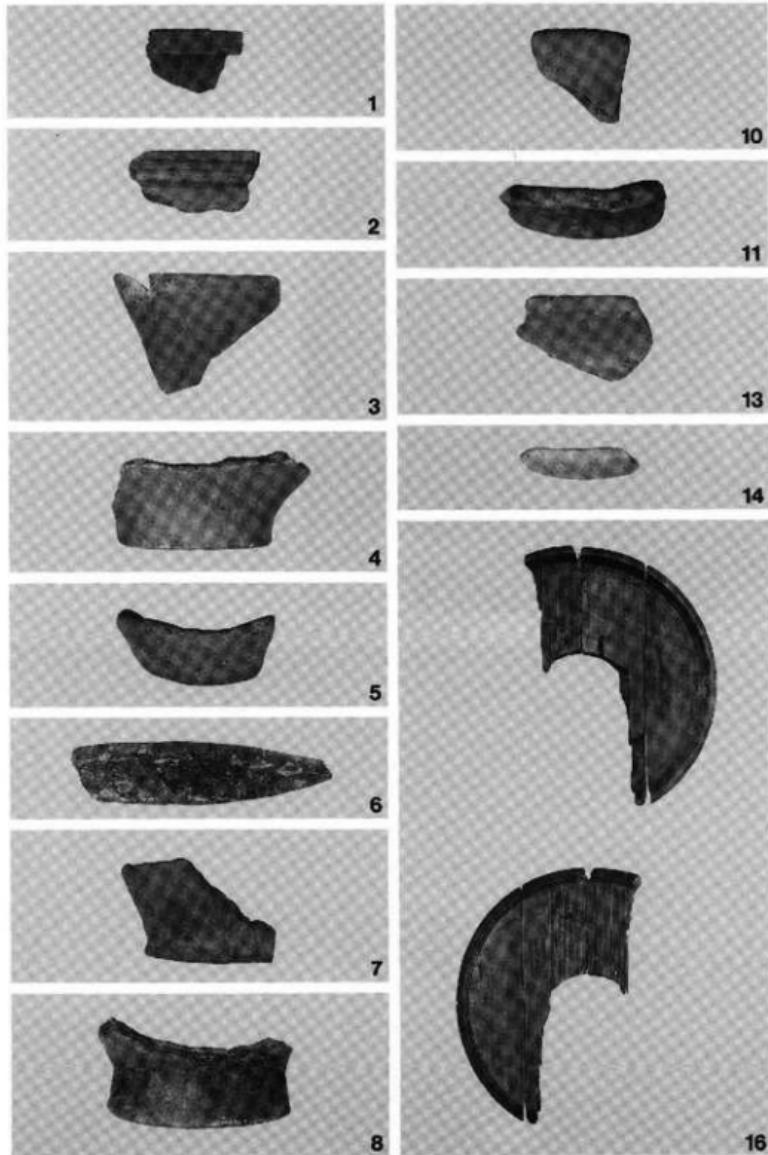


最終検出状況



木製品出土状況

圖版六 垂水遺跡出土遺物



圖版七 護國寺旧伽藍調査前近景



東南から

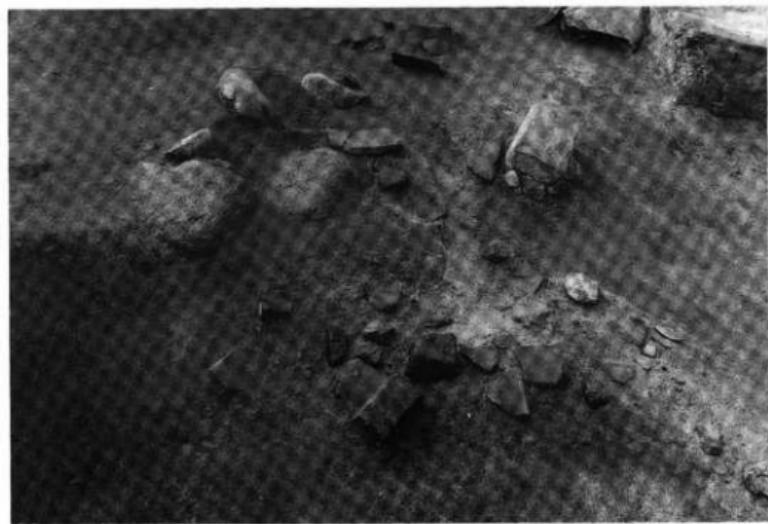


西南から

圖版八 護國寺旧伽藍基壇檢出狀況

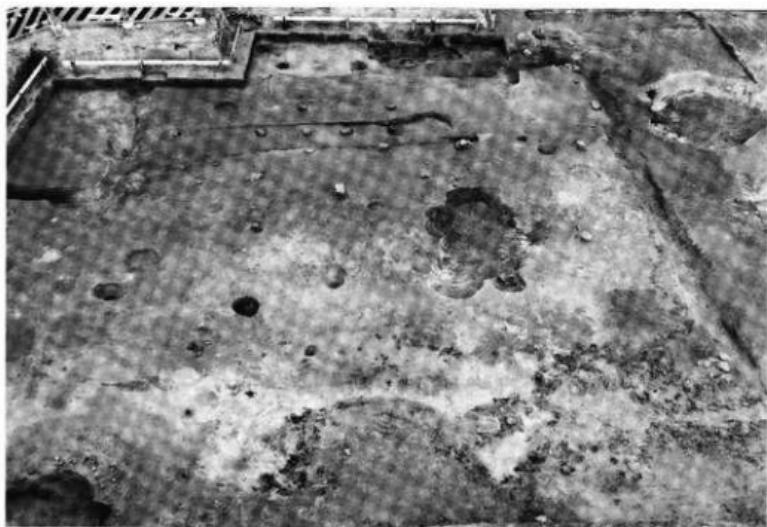


基壇南端部

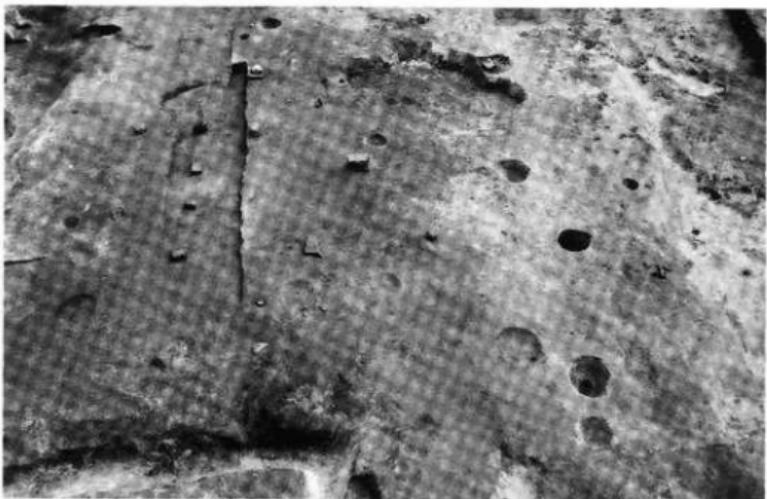


基壇北東隅

図版九 護國寺 旧伽藍 創建時基壇全景 (1)

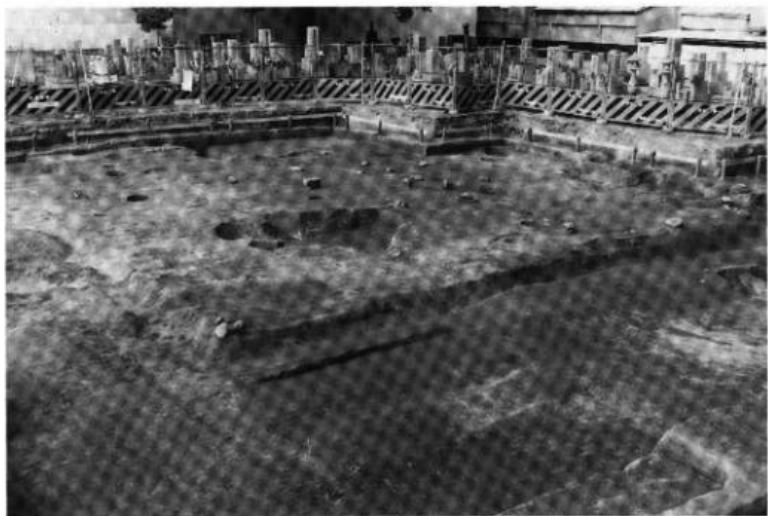


南から



西から

図版一〇 護国寺 旧伽藍 創建時基壇全景
(2)

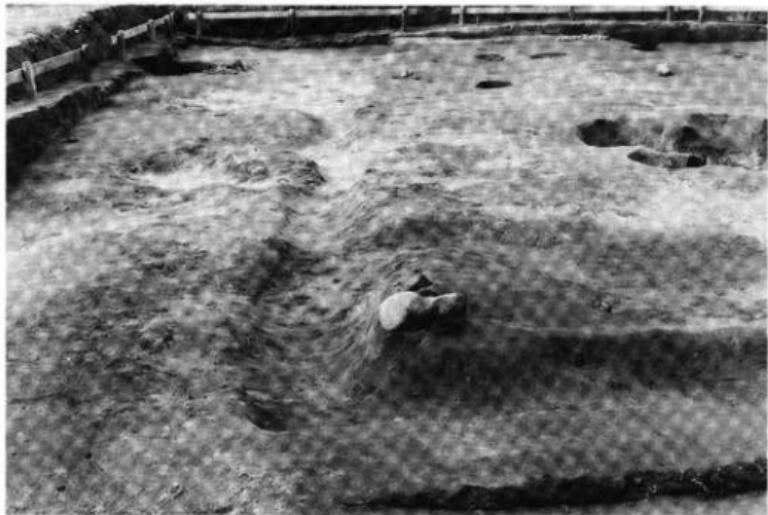


南東から



北東から

図版一 護国寺旧伽藍創建時基壇検出状況

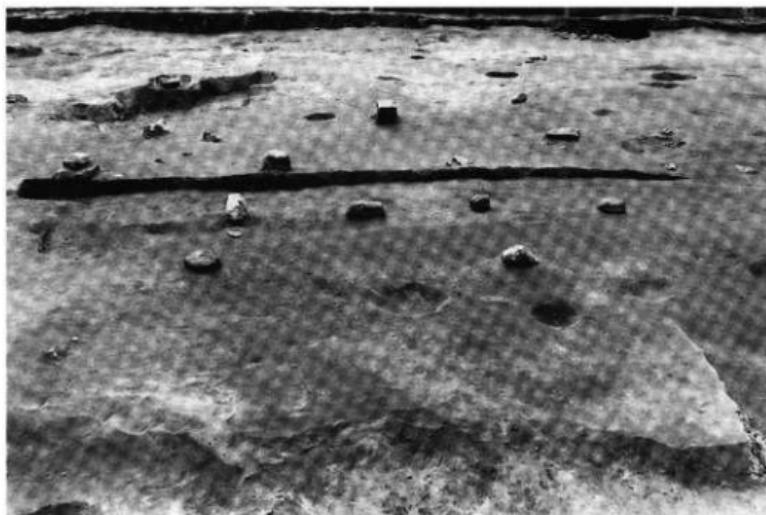


東から



北から

図版一二 護国寺
旧伽藍 碓石検出状況



北から

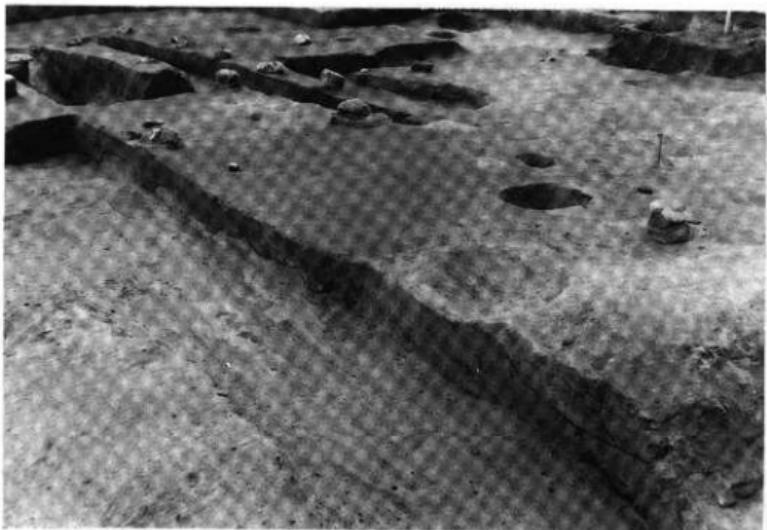


西から

圖版一三 護國寺旧伽藍基壇断面(1)



北西から(A-A)



南東から(A-A)

図版一四 護国寺 旧伽藍 基壇断面 (2)



南東から (C-C')



北東から (B-B')

図版一五 護國寺旧伽藍回廊検出状況

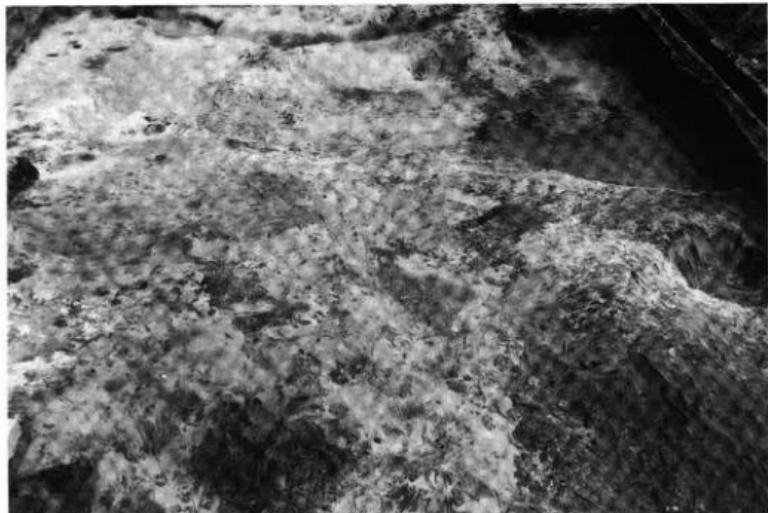


東から

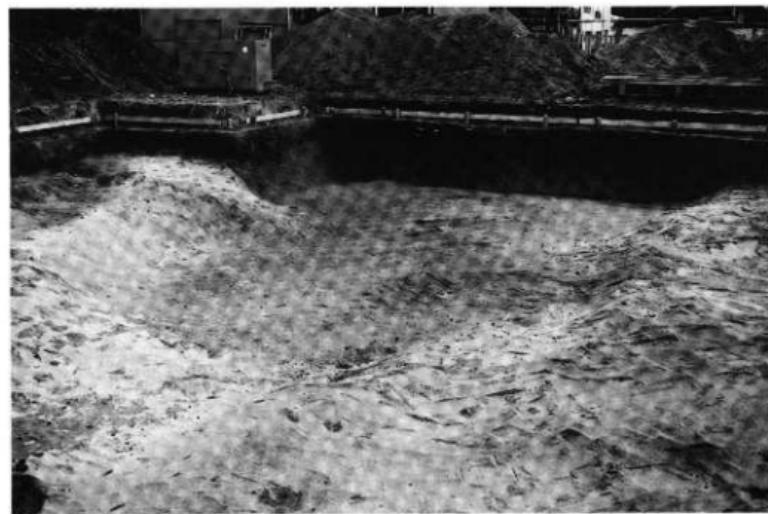


回廊上集石遺構(東から)

図版一六 護国寺旧伽藍 创建前遺構面検出状況 (1)

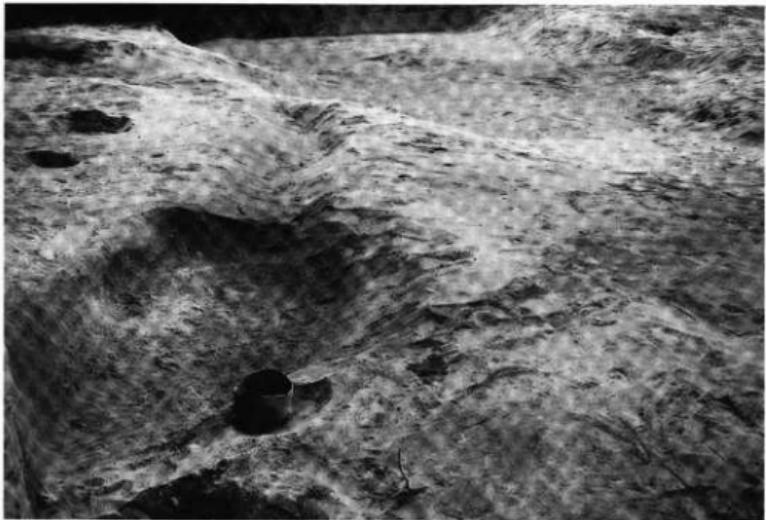


全景(西から)



谷状地形(北西から)

圖版一七 護國寺 旧伽藍 創建前遺構面検出状況 (2)

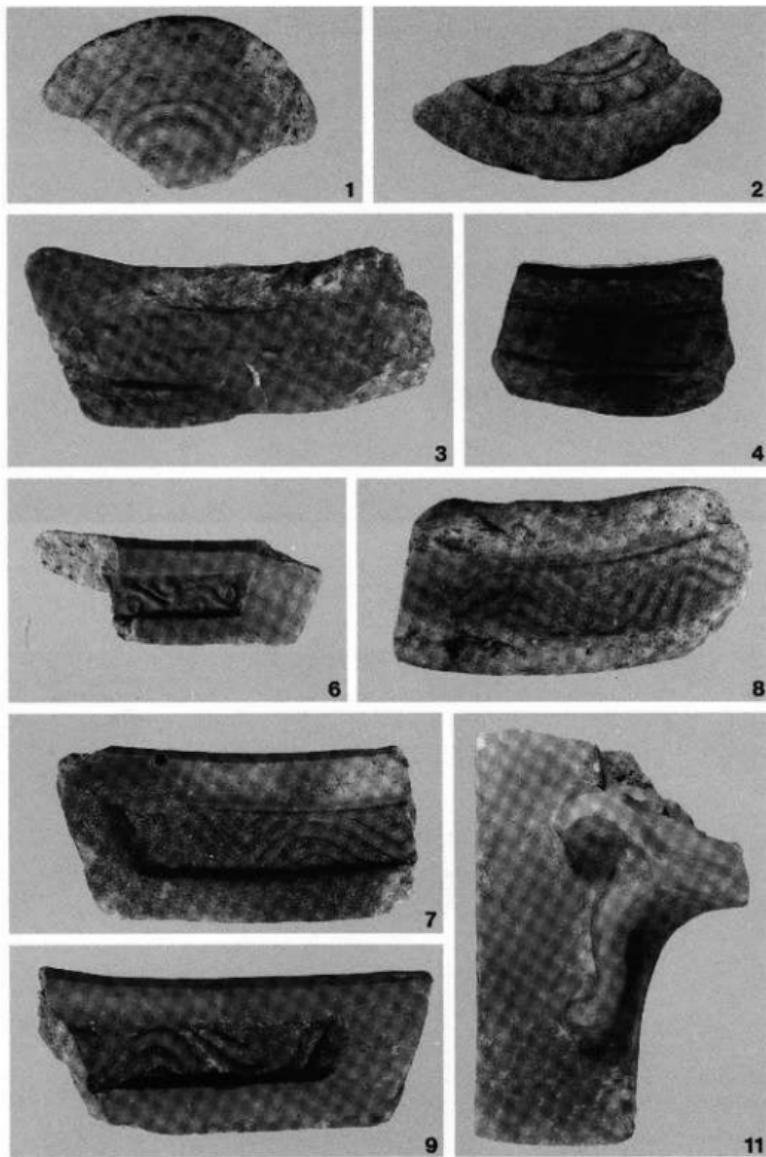


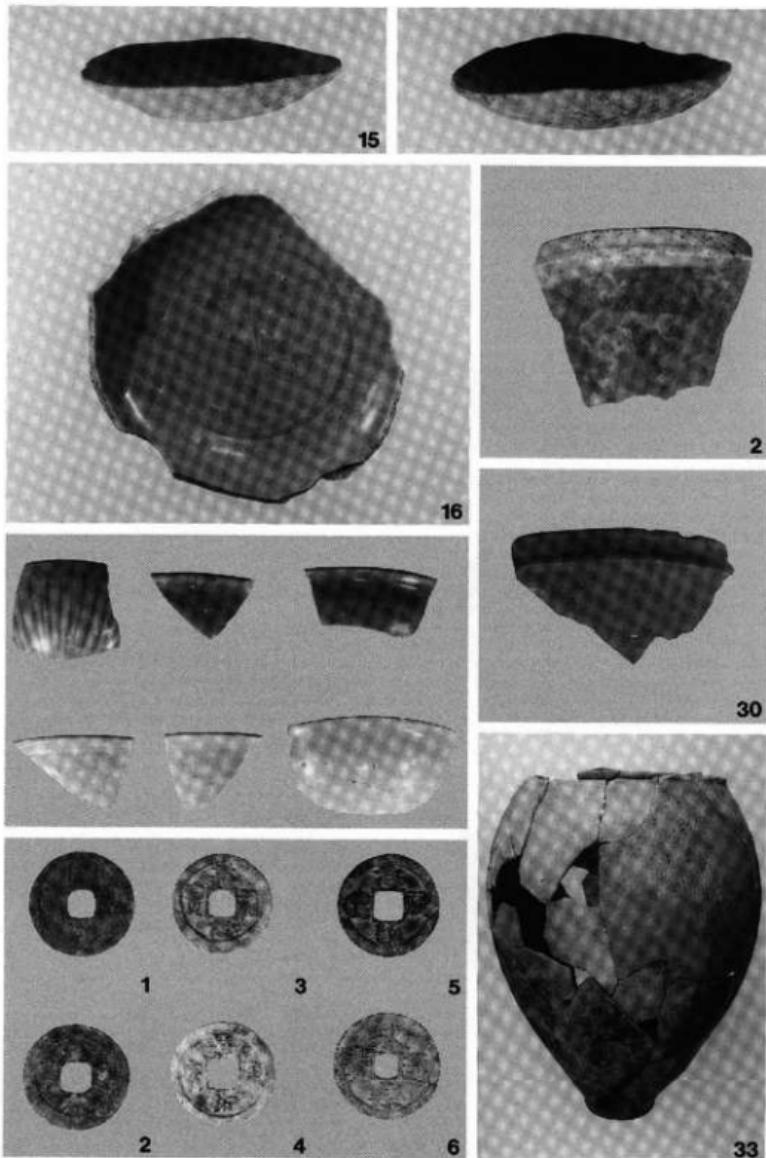
SD01(北から)



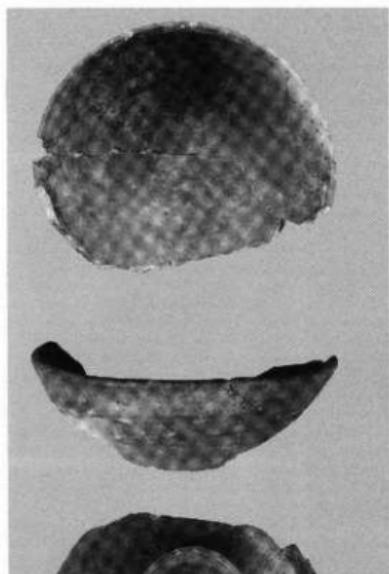
SD01土師器裏出土状況

図版一八 護國寺旧伽藍出土瓦





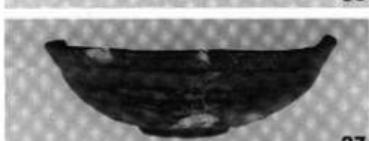
圖版一〇 護國寺旧伽藍出土遺物(2)



41



36



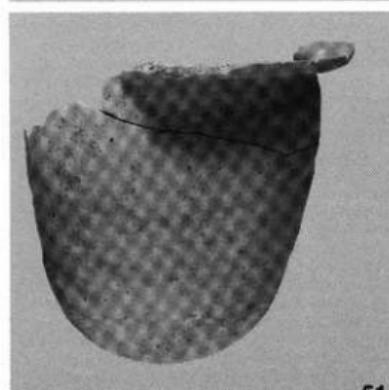
37



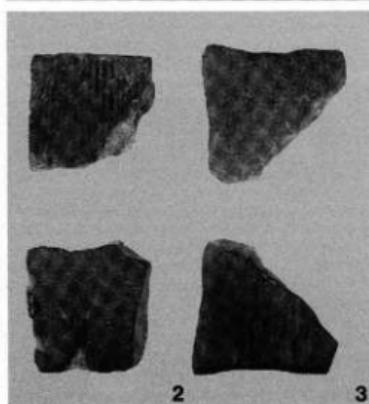
39



44



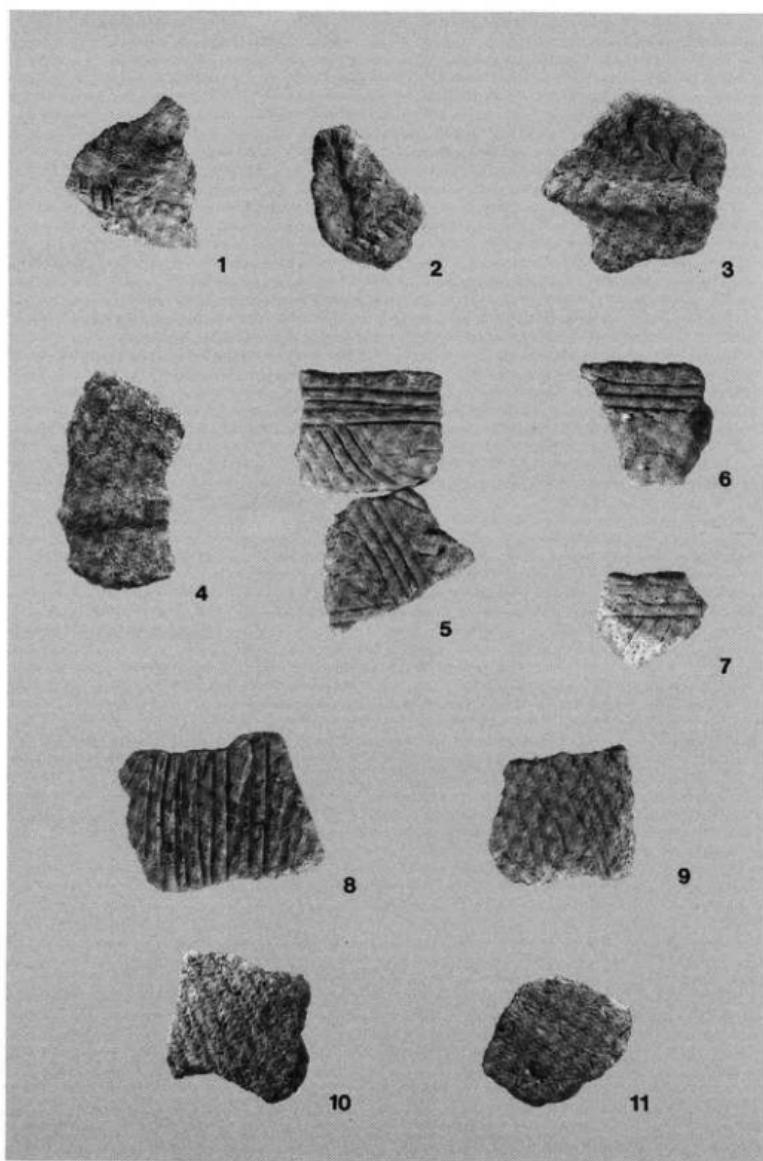
51



2

3

圖版二一 護國寺 旧伽藍出土 繩文土器



〔昭和63年度〕

埋蔵文化財緊急発掘調査概報

垂水遺跡

護国寺旧伽藍

平成元年3月31日

編集 吹田市泉町1丁目3番40号
発行 吹田市教育委員会